

---

# 超次元ゲームネプテューヌ～黒閃の騎士～『外伝』

燐

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

超次元ゲームネプテューヌ〜黒閃の騎士〜『外伝』

### 【Nコード】

N5208Y

### 【作者名】

燐

### 【あらすじ】

ゲームギョウ界の未来を掴んだ女神たち彼女達に訪れる平凡なひと時

彼、零崎 紅夜が冥獄神になる軌跡をそしてmk2に繋がる物語がいまここに語り継がれる・・・

って感じでギャグが大半ながら色々やっついていこうかなと思います！ある程度進めたらmk2もやります（まだ無理ですけど）

では彼、零崎 紅夜の冥獄界に行くまでの地獄で天国の一年がここに始ります

## いきなりこれはないと思う(前書き)

超次元ゲームネプテューヌと黒閃の騎士を見てくれた人またはこれが初めての人はじめまして燐です。

大半がギャグやら戦いやらになると思いますがどうか見てくれると嬉しいです。ではでは

いきなりこれはないと思う

「ごめんなさい」

煌めく黄金の髪が地面と平行する。

ここは神界、女神が存在する神の世界

「あゝ、うんいいよ！」

俺達はゼロハートと超越竜『ゼクスプロセッサ・ドラゴニス』に勝利して未来を勝ち取っただがお互いボロボロなので全員神界にて暫くの休養を取っていた

「それにしても、あれが夜天 空ですね」

俺の隣で呟くのは雄大なる緑の大地リーンボックスの守護女神グリーンハート親しい人物からはベールと呼ばれている

「空とゼロハート、二重人格みたいなものだろ」

空は人に絶望しながらも心の何処かで可能性を信じていた。けどゼロハートは自分の考えを世界に押し付けたただ自分も傷つけたみんな傷つけた放浪していた

「なんか人でも神でも変われるだなんて彼を見ていたら思っわ」

そう呟くのは重厚なる黒の大地ラステーションの守護女神ブラック  
ハートみんなはノワールと呼んでいる

「意思があればどんな生き物であっても変わるさ」

誰かに言われて変わることを者や

自分から言われて変わることを者や

切欠はいつくるかそれは誰にも分からないけどやっぱり大事なものは  
自分を嫌いにならないこと自分で限界という壁を作ってしまったら  
そこから動くことができなくなってしまうから

そういうふうに行きついているとおもっ

「全部終わったのね……」

「長かったです……」

「けどこれでゲームギョウ界は平和だね！」

空はゲームギョウ界に対してのモンスター配給を止めた流石にゲイ  
ムギョウ界から冥獄界にモンスターを送ることは出来ないらしいが  
これでゲームギョウ界のモンスターが増えることはもう無いらしい

「ふう、これで帰れる」

これで約束を果たせる早くリンボックスに帰りたいなベルも今  
ここに居るからきつとアイツ（・・・）寂しがっているだろう



ーイーエンド・オブ・ザ・ノヴァ

ドゴーーーーーイン!!!!

「うわぁ!?!」

突如地震でも起きたかと思うほどの振動が襲う

「空!?!ネプテューヌ!?!」

イヤリングに向けていた意識は天の彼方に飛ばし俺は急いで外に飛び出るそこにはボロボロのネプテューヌ達が積み重ねられその上に座る空の姿だった

「何やってんのおお!?!」

思わずこう叫んだ自分は悪くないはずだ

「いやね・・・OHANASIという肉体用語に思わず全力反撃しちゃったんだよ・・・テへ」

「テへ じゃないだろうが!このバカ空!!!」

ていつかそこはお前が負ける立場じゃないか!?!神はそう言っているぞ!?!」



「どんなフラグでもぶち壊す！それが僕、破壊神だ！！！」

どうだまいったか！と言わん限り胸を張る空になんだか呆れてため息が出た

「……っでこのペンダントを外すなど？」

「そういつごとく」

ガクツと頭が下がる。空がいうのはこうだ俺は存在変換で自分の存在をゲームギョウ界の負の神である冥獄界のハードであるブラッディハートに変換させた。

・・・ここまではいいが後が問題らしい俺はとくに記憶が戻っていないのにも関わらず半場強引で存在を変換をさせたせいで戻れない(・・・)とのこと更に俺自身を存在変換がもう使えないとのことこのペンダントは言わば俺の生命維持装置、神は信仰なくしてその存在を保つことができない俺の場合は全負同調で負をある程度身体に残していたから助かったものもしこれを消費していたら俺は問答無用で消えていたらしい。このペンダントはいわば小さいゲームギョウ界と冥獄界を繋ぐ門のようなもので俺が存在できるほどの負を常時俺に送ってくれるものらしい

これを外した場合は全負同調アーリマン・シンククロでもしてない俺は消えるとのこと基本的にゲームギョウ界の負の念は自然と冥獄界に送られていくものであり人間がいれば俺はずっと存在できるらしいどんな形であっても

「そうでしたの・・・色々とよかったですわ」

全員この話を聞いて心配するかと思っただがとにかく安息のため息を吐いた・・・何故に？

「そんで、紅夜にはしばらく自分を鍛えてもらおうよ！僕が許可する意外は絶対に冥獄神化と全負同調は絶対禁止！！」

胸に手をクロスして強く言われるこれはなんとなくわかる記憶も結

局全部取り戻してない今の俺は武器の使い方を教えてもらった戦士、  
どちらも負の念を極限まで使う切り札で俺はそのコントロールがま  
だ危ない暴走の可能性もあとのことそのため空は一年の修行をのち  
に冥獄界で冥獄神として実習を提案してきた

・・・本音は嫌だがそれしかなんだよな存在変換を使えばまた話  
は別だがこうなった以上俺の選択肢はそれしかないらしい

「一年・・・か」

「短くない？」

「大丈夫！紅夜なら分かるけどレイちゃんの3倍はきつくするから  
！」

「この話は無かったことに帰らせていただきます！！！！」

ふざけるなただのあれ苛めだろ！？気絶してもあの人、空だ止める  
まで永遠に攻撃してくるんだぞ！？めっさいい笑顔で！！その三  
倍！？やってられるかアホー！！！！

今出せる究極のスピードですぐに外に逃亡しようとするが・・・

パシッ！

バタン！

「まあまあ、これもゲームギョウ界の為だと思って頑張つてよ」

「ゼロハートさんの手が途中で無くなったです!?!」

「何の手品なの?」

「これはね空間操作の一種で僕の手の一部の空間を紅夜の足下の空間と繋げているんだよ。後僕の話は空つてよんでよ気軽に読んでよ」

「助けてー!ー!ー!ー!殺されるー!ー!ー!ー!」

あれトラウマレベルなんだぞ!?!反撃許されずただ一方的罵られるなんだぞ!?!

「コウヤがも凄く嫌がつているし・・・辞めたら?」

そつだこの鬼!悪魔!魔王!ノワールがそう言っているぞ!ー!ー!

「ふうん、ねえみんな・・・この写真欲しくない?」

胸から取りだしたのは・・・一枚の写真?なんか俺に似た幼い(・・・)  
(子供がパフェ食つてる・・・?)

「そつ、それは!?!?!?」

「ふふん・・・ロリ紅夜を見たのは君たちだけじゃないだよ・・・  
つで君たち何をすべきか・・・分かるよね?」

・・・やめろ。ネプテューヌ!その手に持つ縄を捨ててくれ!ノワ

「ル」そつ、そうよねこれはゲームギョウ界の為なのよね」とか言いながら得物構えるな！ブラン！その手に持っている危なそうな注射器何に使うんだ？「大丈夫麻酔薬」ぜんぜん嫌な予感しないんだけどー！ー！？

「ベツ、ベールー！ー！！！」

コンパとアイエフも似たようなネプテューヌ達と同じもつ俺にはお前しかない！

「・・・分かりました」

「へえ・・・」

「ああ・・・ベールううう」

希望だこれを希望と言わずなんと言っただ！

「コウヤごめんなさい」

「・・・へっ？」

「私は・・・自分の意思を貫きますわ」

その瞬間、ベールを包む光晴れたその時には守護女神グリーンハートが降臨した鼻から愛を流しながら

「そつ、そんな・・・嘘だよな！嘘なんだから！？」





『むっ？』

「どうしましたかにい・・ゼクス」

『誰かの断末魔が聴こえてな・・（何を言おうとしたんだ？）』

「そうですか・・久しぶりですねあなたと私が二人っきりなんて」

『そうだな・・お互い色々な物を見てきたな』

少し離れたところでは一応兄妹である二人（？）が昔話に花を咲か



していた

いきなりこれはないと思う(後書き)

どうでしたか？最初から飛ばしていきます！ネタ切れが心配です！  
候補生達も早く出したいな・・・

エンド・オブ・ザ・ノヴァ：空が愛用している暴力というには相応しいほどの魔砲、本人曰く星を砕く光という技を元に作ったらしい・  
・

故郷帰り(前書き)

m k 2 キャラ出させたぜ・・・ボールと仲いいのなら・・・だな

## 故郷帰り

草木が生い茂る丘を立つそれと同時に風が吹く。息を吸う今はこの久しぶりに帰って来た自然を独り占め

「帰って・・・来たんだな」

「ええ、帰ってくれました」

見渡せば中世の感じる街並み隣に微笑むベールを見ながら安心感を感じながら瞳を感じる・・・ほんと色々なことがあった・・・ベールたちに捕まって俺の人生オワタと思いつながら自分の武器は壊されたことに気付いた空もそのことに気付いたのか修行は明日かららしい・・・ネプテュー又達も自分の大陸になぜかしぶしぶ帰って行った。

ネプテュー又達と戦ったゼクスは守護するべき大地に帰っていきイストワールはネプテュー又に付いて行った

さて、あいつは一体何の武器作る気だ？できればシンプルなのがいな

「掃除・・・しないとな」

ずっと家空けてきたからな埃まみれだろうな・・・

「フフ・・・」

「ん？ベールどうしたんだ？」

とりあえず今日の予定を組み立てていると横にいるベールがなぜか笑った

「なんでもありませんわ」

「そうか・・・」

良く分からないが自分の顔が面白かったのか？と疑問を抱くが俺はベールに手を差し出す。ベールもそれを理解したように俺の手を握った

「おかえりなさい」

「ただいま」

ただいま、雄大なる緑の大地リーンボックス

「ここまでか」

「ええ・・・」

お互い手を繋ぎ街に下りて行ったもう顔を隠す必要無くなったのでフードは脱いでいるが妙に視線を（主に女性）を感じる隣のベールはいつもの顔して思いつきり手を握ってくるから痛かった。そんな時間もすぐに過ぎ去って中央協会の前

「今更だけありがとな集まってくれて協力してくれて」

「水臭いですわ私とコウヤの仲ですもの」

そう言ってお互い笑いあう中々繋げている手が離すことができない

「・・・また、来るからな」

「！・・・はい、また会いましょう」

俺の言ったことに安心を得たベールはゆっくり手を離して協会の中

に入って行った・・・

「ん〜さて、俺も帰るか」

今日はいいい天気だ布団でも干そうと地面を思いっきり蹴るそれと同じ時に一気に俺の視線が持ち上がるそう言えば自分が説得してジャックは元気だろうかさすがに今は牢屋にぶち込まれていると思うがこちらに協力してくれたしそれなり罪は軽くなったはずだ・・・いつか会えるといいな

「おっ、・・・」

地面に着地する目の前には自分の家が何も変わらずあった。鍵を差し込みドアノブを回す開けた瞬間、古臭さと埃で思わずせき込んでしまう。自体は思ったより深刻のようだ

まずは家の全ての窓を全開する。そしてベッドの下に置いてある掃除機具を取りだす・・・他には何も隠してないよ？本当だよ？

神界を出たのは朝頃でリンボックスに着いたのは昼頃だから今の時刻は三時頃なので小休憩に紅茶でも淹れてゆっくりする

「・・・平和だな〜」

自分でもびっくりするぐらいの気の抜けた声が出る。初めはラストイションからの依頼から始ったんだよな・・・

あ、サンジュは元気だろうかあれも牢屋にいますと思うけどちゃんと未来に向かって歩いていけるといいな。空が半殺しにしてしまったギルドの過激派も病院で大人しくしているだろうか・・・





流れるような黄緑色の髪に紅榴石ガーネットを思わせる少しつり上がった紅い眼、彼女の名前は箱崎チカはこしき。彼女の家は代々ベールに仕えてきた一族でありベールと交流があつたので俺とは自然と関わりができたその中でいい意味でも悪い意味でも懐いてきたのが彼女だ・・・昔は色々あつて敵視されていたがある事故によりモンスターに襲われたチカを助けてから妙に懐いてくるようになった今はすっかり俺の妹分になっている。普段は頭脳明晰、カリスマ溢れた優秀な奴なんだがな。少なくとも俺をいきなり押し倒してガトリングトークをする奴じゃなかつたんでけどな・・・

「・・・聞いているよチカ」

「全く、心配をかけさせないでください！」

腕を組み俺に愚痴りだすチカ・・・いつになったら退いてくれるだろうか・・・

「それ・・・ごほっ、けほっ！・・・」

・・・過呼吸になるまで言うなよお前身体弱いんだから心配してくれるのは嬉しいけどさっ、と内心呟きとりあえず起き上がりチカの足と腕を包むように持ち上げる・・・確かこれを姫様だっこっていうんだっけ？

「ずいま、ぜん・・・」

「全くだ・・・」

干したばかりの布団にチカを置いて落ちつかせるその時に癒しの魔法付きで、最初は苦しく呼吸していたチカであつたが徐々に落ち着

いてきた

「その暴走癖、直せよ？お前に何かあったらベールと俺が心配するから」

「・・・お兄様の匂い・・・」

説教タイムと移行しようとするが布団を顔を埋めてポーとするチカ

「・・・聞いているか？おい」

「はっ！いい匂いでした！！」

ポコッ

「痛いですが・・・お兄様・・・」

「お前が悪い」

変なこと言うチカに一発拳骨・・・もちろん手加減したよ？

「あの・・・お兄様？」

「なんだチカ」

「その・・・えっと、今度はいつごろまで居てくれますか？」

上目遣いでこちらを見つめるチカ少しだけ紅潮した頬と布団を小さ

く握るその光景に萌えという文字が頭に浮かんだのは気の性・・・  
だ！

「残念だけど、明日また仕事だ・・・ごめんな」

「そう・・・ですか」

う・・・いかにも暗黒オーラ垂れ流して目を伏せるチカに物凄い罪悪  
感が溢れてきた

「えつとだな・・・今日は暇だからさ、今日はこれからずっと相手  
して「本当ですか!?!?・・・おお」

いきなり月が出る直前に太陽が月を蹴り飛ばし昼に戻った感じにな  
るチカ・・・

「今日はずっつと甘えていいのですか!?!?」

「まあな・・・ほら」

腕を出すと猫が得物に跳び突くように俺の腕を抱きしめるチカつい  
でに頭を撫でるとゴロゴロと言つこいつの前世は猫だなと思つてし  
まう・・・俺の可愛い妹だ



## 故郷帰り（後書き）

チカ可愛いよ。とりあえず無条件で  
次回は紅夜の新武器そして・・・地獄の修行が始まるよ！！！！

新たな武器そして・・・苛め(前書き)

すいません少々風邪を引いてしまって全く更新できませんでした。  
これから頑張っていきたいと思いますので頑張っていきます

## 新たな武器そして・・・苛め

「・・・空、不法侵入と拉致って言葉知っているか？」

さて俺は現在神界にいる昨日の記憶は確かチカと一緒に昼寝（疚しいことはなかったからな！）して晩飯を馳走して協会まで送って俺は寝た・・・筈なんだが目が覚めると俺の目の前には空がいてその手には俺の新しい武器が入っているだろう横長いケースを持っていた

「不法侵入は正当な理由がなく侵入することだけと僕は紅夜と修行するという正当な理由があるから問題なし、更に拉致って無理やり連れて来ることを言うんだけど僕はゆっくり丁寧に赤子を扱うように連れてきたからノープログラム！」

「・・・ただの屁理屈に聞こえるのは俺だけか？」

「――神は言っているこれが空クオリティだと

「何か言ったか空？」

「ん？なににも言っていないよ？」

「・・・幻聴か？でも気の性で片付けられないような・・・」

「そうだ空、俺の新しい武器って？」

「うん、冥獄神化時の紅夜の武器は双銃剣だからそれに合わせて普段は大剣と銃にしたよ」

持っていたケースを地面に落とす空が指を鳴らすとケースが開いた。  
・・・手で開けるよ

「これが紅夜の新しい武器、『紅曜日』と『緋壊螺』だよ！」

紅曜日は黒曜日の刃を真つ赤にして双剣に分けなくなったがその中央には黒いディスクが嵌め込まれている  
緋壊螺は赤黒き銃でその形状はいつか本で見たサムライエッジに似ている銃先には刺青のように刻まれているなんらかの術式

「銃か・・・」

二つの緋壊螺を持つ、魔法を使ってきたので銃をいままで使ってきたがなかったがこうもつとなんだかい

「緋壊螺は魔力を物質に変換して撃つことができるよ連射も砲撃も可能の一級品！制作時間は4時間！！」

一級品って言う割には制作時間短いな

「紅曜日は20時間だね」

まるまる一日使ったのか・・・それにしても出来すぎていると思っ  
が・・・



「二つとも形を造るだけだったしね二つともヒイロカネという金屬を使っているんだけど僕が長年加工してきたから硬いし魔力伝達とか凄くいいよ」

おもむろに紅曜日を構える重さは黒曜日と同じくらいだが分かるこれは人が作れるような武器ではないことを・・・

「長年っていったよな・・・何年だ？」

簡単に降る紅い軌跡を残しまるで生命を狩る為に生み出されたこの剣は俺が長年使ってきたと思うほどに俺の手に合う

「えっと・・・1億年」

「ながっ!?!」

それ単純計算でもレイさんや俺に会うもって昔になるぞ!

「長生きしているから。色々やりたいことがあるんだよ」

「・・・因みにお前何歳だ？」

こうなるとこいつ年齢がものすごく気になるのはきつと気の性じゃないはずだ」

「数えるの面倒くさくなつたから正確には分からないけど・・・最近1垓行つたかな？」

「・・・一億が可愛く見えるぐらいの歳でしたっつてそれおズ」  
千回死んでみる?」・・・すいませんでした。額に緋壊螺を突きつ

けられ降参を称する為に両手を上げる

「まあ、多少は自覚はあるけどね・・・」

ため息つきながら緋壞螺二丁を貰うついでに専用の鞘も貰い収納していく・・・あ

「なあ、紅曜日のことなんだ？」

真ん中に埋め込まれている黒いディスクただの飾りのように見えるがこれは何らかの力を秘めているそんな気がする

「それはまあ、補助だよそれがあれば少しだけど冥獄神化と全負同調の反動を軽減できるんだ」

あ、それは便利だなあれは一言で言えば絶望だからな全ての負を背負い自我を保つこと自体が辛い

「二回目だけど僕の許可なしでは使つなよ？」

「了解」

最悪の場合は暴走するとかネプテューヌ達女神が希望により力を得られるなら俺は絶望により力が増すが俺の場合は毒を以て毒を制すと言った感じだからな

「・・・・・・・・」

そんな思考をしている俺に空は心底心配そうな顔で見つめていたの

を俺は知らなかった

「じゃ、始めるよ」

ただ草原が広がる地に空は何も構えず立っているポケットに手を突っ込んでいるから凄く余裕の格好だった

「・・・構えないのか？」

「ふ、構えつて無駄な物なんだよ。あると程度の実力者なら構えを見ただけでもどんな攻撃が来るか読まれるしね」

「・・・説得力が妙にあるがそんな実力者ゲームギョウ界に要るのか？」

「いないよ」

「いないんかい！」

きつぱり言い切る空に思わず突っ込んでしまう。ほんとこいつの考えが分からない

「ま、この構えは他人もしているからその人から取って・・・『夢幻ノ無花果』そう僕は呼んでいる」

「・・・確かに俺からしても空には全くとしても隙がないというよりあいつから放たれるプレッシャー前回とのこいつとの戦闘にこんなに冷や汗出たっけな・・・」

「お話はここまで・・・行くよ」

背中 of 紅曜日 to 柄を握り腰に差している緋壊螺をいつでも抜けるように構える・・・先ほど空が行ったが立っているだけの構えなんて

普通出来っこねえよ。前回もそうだが戦闘経験や戦闘力は正直次元が違うまたポッコポッコにされて隙が窺って一気に・・・なんて甘い戦法はもう通用しないよな

「・・・っでいつまで戦闘は始つたのに考え事としているの？」

突如、後ろから聞こえる声、確認せずに身体を回転させ紅曜日を一闪する手応えはないなぜなら空は振つた紅曜日の剣に座っている（・・・）からだ。すぐに緋壊螺を抜き発砲するが身体を少しずらし避けられ掌底を顔に叩き込まれる

「ぐっ・・・!!」

相変わらずのバカ力だ地面に滑るように転がりすぐに緋壊螺を空をいた方向に向ける・・・消えていた

「違うー！紅夜が遅すぎるのさ」

その声と共に背中に走る衝撃自分視線が一気に上空にまで上がるそして太陽に隠す様に広がるのは金色の髪とその腕の中で渦巻く力

「螺旋神魔槍！！！」

腹部に撃ち込められた力は解放させ自分の身体は一気に地面へと叩き込めれる・・・つええ

「まだまだ」

虚空に腕を一闪させるすると空の回りに複数の空間の歪みが生じそこから・・・空を埋め尽くす剣の数だった

「おつつつい!!!」

「大丈夫刃抜きしているから刺さることはないZE・・・多分」

多分ってなんだ!?多分って!?ってか刃抜きでも少し尖った鉄が飛んできたら痛いだろう!!!しかもそんなもの何度も当たれば最終的に刺さるわ!!!

「ふっ、それで終われば君はその程度だったわけさ」

「カッコいいセリフを吐く前にまず君は常識力を学ぼうねー!ー!!!」

「常識を知ると自分が否定されていくもんなんだよ!」

「お前は何様だ!!!」

「神様だ!!!」

もう嫌だこいつ

「武装・鉄血鎖斬舞!!!」

一斉に降り注ぐ剣の雨、俺は新たに得た武器を持ってこれ以上に無

いぐらのの敗北を収めた

## 新たな武器そして・・・苛め（後書き）

空のボケ（？）と戦闘力に精神と肉体をボコボコにされた紅夜、剣をいままで使ってきたせいかうまく銃が使えない紅夜を見た空はは射撃訓練の為になぜかラスティションに連れていくそして新たな出会いも！ではでは

夢幻ノ無花果：正確には技ではなくただの構え立っているだけ空がそれなりの実力に対してのみ使う

螺旋神魔槍：魔力と気の反発を利用し相手に叩きこむ技、剣でも出来る

武装・鉄血鎖斬舞：武装と名のついた技は空が武器を空間に出して攻撃する時に付ける。この技は刃を取った千にも等しい数武器を発射させぶつける技、物理的に十分痛いけど当たりすぎると刺さるかも



射撃訓練？（前書き）

今日は頑張るぞ〜

## 射撃訓練？

「……っ！」

その手に持つ緋壊螺に目標に向かって撃つターゲットは左右に大きく動き弾丸を躲す腕をクロスし乱射するが掠る程度しかない。当たらないことに苛立ちを感じながら自分の周囲を回るターゲットに狙いを定め引き金を引く……

「……ヒョウカ55テン……」

あれから数時間後の結果が機械声で淡々と言われどっと疲れが身体を満たしていく顔に付けていたバイザーを外すと景色が一転し広がる草原だけが見通せる

「何点だった？」

「55」

横であれ〜？と顔を横にする空、どうやら思ったり出来ていないことに疑問を抱いているようだ……俺自身銃使うのは初めてに近いんだから期待するなよ……

「自体は思ったり深刻……どうしよっかな……」

いまだに空の思想の中では昔の俺が混じっているらしく度々比べら

れる。そんなに昔の俺は強かったのかよ・

「拗ねちゃった？」

「拗ねてねえよ」

緋壞螺を持つ俺の腕のサイズとか全て計算された俺の専用銃に仕上げてくれたのは嬉しいがうまく使いこなせない

「剣術の基本は出来ているから後回しでいいんだけどな・・・銃術はな・・・」

「お前も銃使うなら教えてくれないか？つてか教える」

規則外のお前なら出来るだろう

「・・・分かったちよつとラステーションに行こつ」

「話聞いてたか？」

「聞いてない」

心に決めたいつかお前にもう一度勝つてやる・・・！

鋼鉄の工場が立ち上り黒煙が蒼き天空を浸食するように広がっていきここは重厚なる黒の大地ラステーション

「っでここに何の用で来たんだ？」

「ん〜まあ後でのお楽しみ？」

空の背中にとりあえず付いていく過ぎ去っていく人々の視線がかなり強い女性は俺に男性は空に・・・何とも気まずい

「どっしったの？」

「いやな・・・視線が・・・」

少しうんざりしていると空が振り向き声をかけてくるそれに返すがこいつは感じないのか？

「はぁ、自分の容姿くらい自覚持ったら？」

ものすごい呆れたため息を付かれた一体なんだ？

「もういいや、ほら行くよ」

強制的に手を掴まれ引つ張られるように連れ行かれるまた辺りの人が五月蠅い一体なんなんだ？

「……っで「」？」

「」」」

空に連れて来られたのはなんとゲームセンター……略してゲーセン……ってそんなことはどうでもいい！

「あ・そ・び・に・き・た・の・か・？」

「イタイイタイイタイ！！！」

俺の出来る全ての力でアイアンクローを決めるなにかの補正が動いたのか自分でもびっくりするくらい捕まえれた

「僕の天外頂点唯一無二の頭脳が~~~~！！！」

「……ここで『ぷちっ』としたほうが世の中の為になるだろうか……  
いいような……悪いような……」

バンっ！

「……これは威嚇射撃よ！すぐその手の女性を離しなさい」

かすかに掠り飛んだ髪を見ながらこりやまずいと思ひ振り向くそこ  
には……ノワールを少し幼くしたような女性だった……そして  
空は男だぞ……見た目は女だが

「これがお前の狙いか……空」

「いや、計算外だけど……面白そうだから採用」

抑えていた腕を掴み危機感を感じたその時には横腹に衝撃が走り吹  
き飛ばされる

「ええ！ちよつと……！！！」

……俺は受け身を取れずその女性を衝突した

「……………」

俺が目覚め最初に見たのは白、純白の穢れ白だった、上を向けばはみ出るように見える黒い布

「あいたた・・・一体何なのよ・・・」

白が喋った!?・・・なわけないか・・・ああもう・・・いやだ・・・

「……………ひっ!?いやああああああああ!!!!」

俺が見た最後の光景は振り下ろされる裁きの鉄鎚アサルトライフルだった・・・空、一発殴る

「 やれるもんならいつでもでもござる 」



射撃訓練？（後書き）

はい名前は出てないけど誰だかは分りますね（思いつきりアサルトライフル使うのはとあの人だけだし・・・）

短いな・・・次回は今回よりは長くしたいな・・・と思っています

久しぶり？（前書き）

ユニとの会話少ない・・・

久しぶり？

「・・・知らない天上だ」

目が覚めお決まりの言葉を言ってしまうこれも神（作者）の策略なのかそれともただネタがないのか・・・疑問に思うがとりあえず身体を起こす近くに自分のコートが掛けられているが緋壞螺と紅曜日がない・・・うむ、ちょっとまずいな

窓を開き周囲を確認すると自分はラステーションの協会にいたことが分かった・・・ノール居るかな・・・

「目覚めたようですね」

後ろから声を掛けられ振り向くとそこにはスーツ姿の男性

「あなたは・・・？」

「私はガナツシュと申します」

眼鏡を付け直しいかにも腹黒そうだと思ったのは秘密だ

「えっと、零崎 紅夜です」

「知っていますよ『黒閃』と言われた貴方は協会の中では有名です」

「はぁ・・・」

久しぶりに自分の二つ名を言われなんとも変な気持ちになるが自分の武器が気になった

「あの・・・自分の拳銃と大剣を知りませんか？」

「あれはこちらで預かっておりますこれから用事でもあるようでしたらお返ししますが」

なんか意味ありげないからだなぁと考えると再びドアの開く音そしてそこから出てきたのは間違いないノワールだった

「・・・あなた一体何したのよ」

「・・・空の性です」

それを聞いたとたんああなるほどと可哀そうな物を見るよう目つきに代わる同情は時に武器になるってどっかの本に書いてあったな・・・  
・心痛い

「どうやら私はお邪魔のようですね。ではデート行った仲間ごゆっくり・・・」

「ちょっと！何言ってるのよ！ガナッシュ！！あれは・・・！」

「ただのお付き合いだよな」

そう言った途端ノワールがものすごく落ち込んだ・・・何故に事実だろ？

「えっと、ファイト？」

「貴方の性よ！この朴念仁！！」

なんでそこで俺がわからず屋になるんだ？何で怒るだこいつは・  
分からん。それからノワールを口を聞いてくれるまで数十分時間を  
必要とした

「なるほど射撃訓練ね」

「あんまり得意じゃないからな」

要約話を聞いてくれるようになりラストイションに来た理由を話す。  
ちなみに外に出ている庭の咲く花の香りが鼻を刺激する

「そう言えばコウヤは今まで魔法と剣術の混合だったんでしょ？」

「そう・・・だな、とはいえ詠唱中は無防備だからあんまり使わな  
いんだけどな」

俺の使える魔法は殲滅魔法が多いからとにかく困る強力すぎたり詠  
唱が無駄に長かったり余裕がある時しか使えないとてもめんどくさ  
い・・・昔の俺は殲滅好きだったのか？

「私もコウヤにどちらかといえば剣術メインだし・・・やっぱりこ  
こは！」

「1111は？」

「実戦でしょ！」

最終的にはそこにたどり着くのか・・・悪くはないかな？

「でも俺武器ないぞ」

「・・・ああ、ケイね少し待ってね」

と言いつ残し協会の中に入っていくノワールその背中を見ながら一息・・・さつきから視線を感じる後ろの木を見る

「・・・バレバレだぞ」

ひっこりと彼女と同じ黒曜石を思わせる髪がはみ出ている

「あんたがああ『黒閃』？」

「俺自身が名乗っているわけじゃないけどな、勝手に名付けられているんだ・・・えっとさつきはぶつかってごめん・・・」

「ふん！あんたなんかお姉ちゃんにぼっこぼっこされるがいいわ！」

うわあ・・・滅茶苦茶怒っている・・・ってお姉ちゃん)・・・(？

「まさか、お前女神候補生？」

四大陸の女神に会ったが確か女神以外にも信仰力シエアを集めることができる人（神？）材が女神たちの妹、女神候補生、よく見れば見るほど姉であるうノワールによく似ている

「そうよ私が重厚なる黒の大地の女神候補生『ユニ』よ!!」

「やっぱりかノワールによく似ているな」

その強気な瞳とか髪の色とかそっくりだ

「・・・なんかリアクション薄いわね」

「いやな・・・なんか慣れた」

こんなに力づくよく女神（候補生がつくけど）に自己紹介されたのは初めてだけどなんかなあ・・・そういえば俺はどういう立ち位置なんだろう冥獄神と言われたけど冥獄界は空が守護（管理）しているんだし・・・なんもやることない俺・・・ニート神？

「ちよつと！顔面蒼白よ!？」

ニートは嫌だニートは嫌だ大事なことなので二回言いました。今度空に会ったら仕事のなもの貰わないと・・・!

「ダイジョウブ・・・モンダイナイ」

「その顔じゃ万人に聞いても疑われるわよ・・・」

「いつでもいい?」

「いつでも」

しばらくするとノワールが俺の武器を持ってきた聞く限りはどうもオーバーテクノロジーが多く使われているらしくこの教祖が売ってほしいとかまあ、一応あいつが俺の為に作ってくれたものだし売る気は一切ないし勿論断ったが

腰に緋壊螺二丁、背中に背負った紅曜日を握り締めいつでも動



ける体制を取る対してノワールは既に女神化して巨大なシュートソード手に・・・やる気万全だ

「ユニ合図お願い」

「分かったわお姉ちゃん」

やっぱり姉妹だったのかユニが自分のアサルトライフルを手に空に向けた時俺は気を引き締めるあの時とは違ってもう自分を守る枷リミッターはいらない・・・全力で行く！

バンっ！

銃撃の音と同時に俺とノワールの剣が交ぜ合わさった

「分かっているけど前みたいに手加減したら許さないわよ！！！」

「はっ・・・いいぜ！ただしその頃、あんたは八つ裂きになっているだろうがなああ！！！」

――魔闘剣皇撃

連続に振るう剣舞それを全て受け流していくノワール、自分の持っているのは大剣だ懐に入られたら対処ができない

しゃがんだ直後、自分の頭上を通る刃そのままの体勢で足を蹴り体制を崩され剣を振り下ろそうとするがそれを読んでいたノワールは銃を構えており振り下ろそうとした大剣を横に乱入され銃弾を防御するその瞬間ノワールは銃を持っていた手を地面に付け横に身体を半回転し強大な質量と凶悪な加速力を付けた一撃が防御を押しつぶす

「……っ、痺れた」

「まだまだ……これからよ!!」

強い、前とは全然違う……ゲームギョウ界に起きた残酷な人の暴走そしてその女神が命を賭けて平和を目指した末路、そしてその歪みながらもその意思を受け継ぎやり直しと言う形でゲームギョウ界を守ってきた破壊神の信念それを俺達は破壊して今があるもし俺たちが敗北していれば……ノワールもみんなも今はいつものようにモンスター討伐に追われていたかもしれない。

けど、俺達は歪みながらも進まれた道をぶち壊し今を得たこれから起きることは定め（シナリオ）にはない。最後にゼロハートは教えしてくれたかもしれない……女神である責任そしてその名を背負う覚悟をそれはここいるノワールも含めてみんな理解した苦悩もしたけどその時はお互い支えあった……絆が俺達を知らない未来へ導いてくれた……だから俺達は証明しなくてはならない。

今ここで俺たちが成し遂げることは全力全開で前に進むことだ！

ノワールside

「（スピードが上がってきている？）」

最初の一撃でリズムはつかめこっちが優勢になったと思えばそれを飲み込むほどの力でコウヤは立ち向かってくる。不思議と頬が緩む

コウヤとの出会いを思い出せばこんなことになるなんて夢にも思っ  
てなかったコウヤに手加減されて負けて落ち込んだに・・・だ、抱  
きしめてもらって勇気つけられて一緒に食事して・・・襲われて協  
力してモンスターを倒して

けど、町はボロボロになってそのときゼロハートが現れその時私の  
ブラックハートとしての物語が始っただと思っ

イストワールを通してコウヤから言われた私が知らないゲームギョ  
ウ界の裏の出来事、モンスターを生み出す冥獄界のハードであるゼ  
ロハートが行ってきた数々すぐにそんな奴倒してやるうと神界に行  
こうとしたのを止めたのはコウヤでハッキリ言われた『勝てない』  
っど悔しかったけど私を倒したコウヤそして同じである女神は二回

立ち向かい瞬殺されたという事実には耳を疑った・・・他の女神と仲が良かったのも私だけコウヤの過去をしらないことに少し嫉妬したけど

超越竜『ゼクスプロセッサ・ドラゴニス』との戦いは苦戦を余儀なくされていたけどネプテューヌが自分から頭を下げてきたときはすごく驚いたけど思えば変なプライドで未来を左右するなんてそれは傲慢なこと私もみんなも・・・自分の信仰してくれる人を守りたいその思いで結束して倒した

「・・・楽しいわね」

「そうだな、けど・・・勝つのは」

私は零崎 紅夜のことを好き

まだ告白とかそんな勇氣はまだないけど・・・いつか私が勝ってあなたを私の物にしてみせるわ!!!

「俺（私）だ（よ）!!!」

ノワールside out

「・・・俺の勝ちだな」

「ふう・・・負けたわ」

空へ弾いたシュートソードは地面に突き刺さり紅曜日がノワールの首元に突きつけている・・・俺の勝ちだ

「完敗よ・・・まだ私のような戦闘モードにもなっていないんですよ？」

「暴走の可能性があるらしいから今は自分を高める為に修行中だ」

お互いの武装を解除する今回は単純な剣術と銃撃バトルだったので周囲の被害はすくない・・・方だと思う

「お姉ちゃんが・・・負けた？」

信じられない物を見るようにユニが呟いた

「上には上がいるの・・・今度は勝つけどね」

「そりゃ、楽しみだな」

そっぴい笑いあうお互いもうボロボロだ

「っで・・・いつまで見物する気だ？空」

なにもない虚空へ言葉を掛けるすると空間が歪みそこから飛び出て来たのは興味深い顔の空だったユニが「お化けッ!？」と驚いたのは仕方がないことだな

「昔とは違うね」

「どづいつことだ？」

「昔の紅夜は訓練派だったんだよ自分で鍛えて自分で強くなっている。くみたいな。けど今の紅夜を見た感じは実戦タイプだね戦えば戦うほど強くなっている」

「俺と俺を比べるな・・・とは言わないけど俺は俺だっということ理解してくれないか？」

その言葉に空は黙ったお前の知っている紅夜は・・・もういないんだ俺が代わりになってしまったから

「哀しいな・・・分かった訓練スケジュールを少し見直すね！」

前者の声はととても聞きづらい声だった。空は夕闇に染まってい

「それじゃ、帰ろうか紅夜」

「おう、ノワールにユニまたな」

「またねコウヤ」

「.....」

なぜかしばらく黙るユニどうしたんだ？

「あんたはなんでそんなに強いのか？」

昔も同じような質問されたな・・・答えることは決まっているけどな

「誰かを守ろうとする心さ」

「……っつ！」

微笑んだだけなのになぜか目を逸らされた少しまぶしかったから片目閉じたけどなんかあったのか？







――ねえ、空やっぱりコウヤって自覚ない？

――蟻んこ一つもないね。全く夕照をバックに笑顔+ウインクなんて狙っているしか思えないよ

――まさかユニがライバル入りとかないわよね・・・

――女殺し（ガールキラー）の紅夜にその言葉は戯言だね

――ううう・・・やっぱり紅夜って・・・

―――なんだかんだ惚れた人の負けだよガンバ

―――ありがとうって・・・はわわわわ!!何で知って・・・

―――これだけは昔も今も変わらないんだよね。ははは

―――・・・貴方も苦労したのね

―――・・・うん

以上女神と破壊神のトークでした

久しぶり？（後書き）

別に紅夜は銃が下手とわけじゃないんですよね空からしたら下手な話であってそれなりには上手いですよ人間レベルなら当たる確率で言えば10発中7発あたるぐらいです

初めてside使ってみましたけどどうでした見直してグダグダだな・・・と思いながらmk2の設定をいまだに考え中・・・初めは決まっているけど最後が全く決まらない・・・！

やっぱりお前は常識力を学べ(前書き)

今回はある意味予告編みたいなもの、短いですが・・・どうぞ

## やっぱりお前は常識力を学べ

「冥獄神としてなにかやることあるか？」

いつもの模擬戦（という名の苛め）を終えた後、草原に寝転び疲労により首だけしか動かせず俺の視線にはいるのは風と撓まれる黄金の髪

「ん？ん〜」

顎に手を置き模索する凜々しくも美しくそして可愛さも含めた反則的な貌を歪ませ光を拒絶させる銀の双眸が独特の輝きを放つ

「今はないかな、冥獄界は僕が管理しているし・・・まあいつか僕の代わりになってもらうことになるけど・・・まだ無理だね。冥獄神化もまだ危ういし」

「う・・・」

模擬戦を通じて何回かは冥獄神化と全負同調ブラッディ・ハート・アーリマン・シンクロになったが単純に言う

と呑まれかけた（・・・）偽神化は負を吸収して力を得るがその分吸い込んだ分の負が身体を蝕んでいくがそれは自分の精神力で抑えることができるが冥獄神化の力の根源は『絶望』だその力を使いこなすのに俺はまだ未熟で逆に力に振り回されて最終的には呑まれて絶望の意思のままに動いてしまう。

負を強化に使えるほど吸収する偽神化はまだいいが全負同調アーリマン・シンクロはまま全ての負と波長を合わせるので闇を司るほどの力を得るが、これは俺が核となつて複雑に絡み合う負を一本の糸にすることにするこ

と己の一つの存在が全ての負の念をコントロールできる訳がない・  
・ 大事なことはどんな負でも自分を保つこと

――まあ、言ってしまうえば半分暴走している状態だ

操れはしないが使えることは出来る今の俺は三分だけ正気を保つことが出来る暴走したら・ ・ ・ 世界三つ四つは滅びるつと空に言い切られた

「大丈夫今のところ今のゲームギョウ界にタイマンなら紅夜は絶対に負けないよ・ ・ ・ たぶん」

相変わらず俺の思考を読むのが得意な空確かにこの前ノワールに勝ったし一対一対なら自信がある・ ・ ・ 多分？

「僕の息子ゼクスならいい勝負が思っぜ！そして勝ってくれるよ！」

・ ・ ・ こいつもしかして親らしいことしてないとか色々言っているけど・ ・ ・ 子煩悩？

「それにそろそろいいかなってね」

懐から出されたのは四大陸それぞれの地図だった頭に？が浮かぶ空は並べた地図に親指を噛み切ってそこからでる血で印を付けていく・ ・ ・ ペンとか持ってないのかお前・ ・ ・ かなりビビるぞ

「僕はいつでもゲームギョウ界にいるわけじゃなくてねもし昔の・ ・ ・



・アレ(・・・)のような存在が出てきたら少しでも僕は向かうまで時間稼ぎになるようなとりあえずパラメータを色々MAXにしたモンスターを封印しているんだよ」

「そーなのかーって！そんな危ないモンスターがいるんかい！！！」

「そうだね解き放つたら今の大陸なら滅びるじゃないかな？強さで言えばゼクスよりちよつと弱いぐらい」

ネプテュー又達が結束してやつと勝てたゼクスよりちよつと弱いぐらいつて滅茶苦茶脅威じゃん！

「ちなみに大陸一つ一つに封印しています」

「そんなのが四体もいるんかいー！！！」

なんて核爆弾を大陸一つ一つに置いているんだお前はー！！！！

「大丈夫だよ・・・ゲームギョウ界に危機が訪れない限りは封印は解けないようにしているし・・・でも、もう必要ないかもしれないから処理を頼もうかなってついでに僕の今のゲームギョウ界がどんなものか視察していきたいし・・・ちよつと話したいことあるし」

それってようは俺に後始末頼んで自分は遊ぼうかななんて欲望が見えるのが気の性じゃない気がする

「大陸中回るから再会や新たな出会いもあるかもよ？」

そうだなそろそろ作者が唯一最後くらいに思い出して出してないキヤラもいたしな メタ発言ヤメテ！by作者

「どづいつ順番に回るんだ？」

「そうだねプラネテューヌ ルウィー リーンボックス ラステイ  
ションを予定しているよ」

ポッコポッコにされた身体は要約動けるほどまで回復して立ち上が  
る神界の空はいつでも青空だ

「それじゃ行こう紅夜！」

「へいへい、仕事もらえた分ましか」

満天の笑顔と強引に引っ張られ足が運ぶ今日もいい天気だ

やっぱりお前は常識力を学べ（後書き）

さてさてこれから大陸回るぞ！新キャラだすぞ

がすとは出したのにあのキャラは思い出したのがルウィの終わりです  
出すのを断念した自称正義のヒーローだすぞ！！次回で出るかは  
分かんないけど！！！！

いざ！プラネテューヌへ！！（前書き）

今回最初少しシリアス？があとともう・・・ははははははです。

いさ！プラネテューヌへ！！

四大陸の中で最も科学力が進んでいる大陸プラネテューヌここに一体で大陸を滅ぼすという凶悪のモンスターが居るということで俺こと零崎 紅夜はやってきました

「何がどう間違ったらあのネプテューヌが守護している大陸がこんなにも進歩するんだらう？」

隣で屋台で買った(奢らされた)アイスクリームを舐めながら辛辣な言葉を吐く

「それは関係ないと思うなプラネテューヌの人がもつと便利になりたいと思ってここまで進歩したんだその言い方はどうかと思う」

「・・・まあそうだね。感情の生き物だもんね人間は・・・」

やっぱり人間に対しては厳しい所があるなこいつの過去を見れば厳しくなるもの当たり前かな可能性を信じてても可能性は混沌だからなにが起きるか分からないからな・・・

街中を歩く空の貌は無表情に近いものだったが内心は楽しんでいるように見えたずっとアイスクリーム美味しそうに舐めていたし口では言っているが正直者じゃないな空は

「あの、すいません！」

後ろから声を掛けられ足を止める振り向くとそこにはセーラー服に

似た服装にどつかで見た見た十字キーの髪飾り薄紫色の髪にぱっちり開いた瞳しつかりした雰囲気を持つネプテューヌの影を感じる女性があった

「……！！！」

「……空？」

彼女を見た瞬間空の髪が星色に瞳はルビーを思わせる真紅に染まっ  
ていく……っておい！？破壊神化！？  
ゼロハート

「ちょ！すみません！！！」

状況が全く分からないがこのままでは危ないと判断した俺は路地裏に空を無理やり連れていく

「どうしたんだよ空！」

「……滅ぼしに来たの……？。いいよ、もう……こんなゲームギョウ界意味がないから……ごめんなさい」

「……ごめん気分悪くなったから討伐は明日にしよう」

「おい……！」

何も言わず空は空間を歪ませその中に入っていく……どうしたん

だあいつ、まるで敵でも見るような目をして・・・そんな疑問を抱きつつ俺は路地裏を出ると心配そうにこちらを見つめて来る先ほどの女性の

「あの・・・私、気の障ることもしました・・・？」

「いや・・・元からちょっとおかしな奴だから大丈夫だえつと要件はなにかな？」

「はい、お姉ちゃんを知りませんか？今日虫歯の検診で・・・」

それは困った姉だなそう言えばネプテューヌもよく食べるくせにすぐ寝るからアイエフが虫歯になるとか注意していたな・・・

「君のお姉ちゃんの名前教えてくれない？」

「ネプテューヌと言って私と同じ髪飾りしているんですけど・・・」

・・・はい女神候補生でした。これで二人目ですな

「はぁ・・・あいつか」

「えっ？お姉ちゃんを・・・あ！もしかして貴方がお姉ちゃんが言っていたこうちゃんさんですか！？」

言い方がおかしいが間違っではないな

「まあそうだな、女神候補生様」

「様だなんてそんな崇高な存在じゃありませんよ候補生ですし・・・」

あ、私の名前は『ネプギア』です」

それでも普通ではまずなれないからなあと姉ネプテューヌと違って真面目だな

「零崎 紅夜だなよろしくなネプギア」

「はい！」

自己紹介を済ました所で姉探しが始った。なんで空がネプギアに対して敵意を向けたのかは分からないが・・・あいつは終わった・・・(ゲームギョウ界を見て来ているだから似た人が出てそれ不思議じゃない過去でネプギアに似た誰かが空と何かあったのか・・・きつとあいつは答えてくれなさそうだな

過去の事は切り捨てるとかを言ったら空は本気で怒るだろうなあうちからしたら俺達はまだやっと立った赤子程度ぐらいしか生きていないそれを理解せず言ってしまったら喧嘩を売っているようなものだ

「あの・・・」

「なんだ？」

「いえ、ずっと難しい顔していたんで・・・」

女神候補生としてこのことを知るのはいぶん先になりそうだなまだ覚悟とか色々いるだろうし・・・なにより今は平和だからこんな暗い話はいいだろう。知らない方が幸せっていうのもあるしな

「大丈夫だ、問題ない」



「そうですねか……」

姉とは逆だな……礼儀正しいし真面目そうだし身長は……もう同じくらいか？真面目成分はこっちが全部持って行ったか

「ネプテューヌが行きそうな場所は？」

「うっくん、ちょっと「危ない」と「ふええ!？」」

思考するために頭を下げたとき角から人が走ってきたのでぶつかると判断した俺はネプギアの手を引っ張るいきなりの事に反応出来なかったネプギアはすっばりと俺の胸に収まった

「~~~~~!!!!」

ネプギアの頭から沸騰したやかんの如く煙が吹く熱いぞ

「……大丈夫か？」

「ふあーい!?だいひょうふでふ!!」

なるほど「はい!?大丈夫です!!」かこの頃空と会話していたから常識がある人と会話すると新鮮さを感じる

「そうか、はい。また人に当たりそうになったら大変だしな」

そっぴい手を差し出す。だれださっき俺にこの女(神)殺しって言った奴は

「は、はい……」

おずおずとネプギア俺の手を握ってくれたとても脆くてとても優しい手だった

「すう・・・すう」

「こんなところにいたのか」



・

・

・

「ブハツ!!!」

なんなんだこの破壊力は！危うくネプテューヌを落とすところだつたぞ！？いつもチ力にお兄様、お兄様つてベタベタされるがこれは全くの異次元だ！例えるならそう！空のゼロ・レクイエムを10発分の世界規模の威力！！ぐっ・・・沈まれ俺の顔の中心にある二穴何も出さなふんばれ！ここが正念場だ！！！！

「大丈夫ですか『お兄ちゃん』？」

「OKOK大丈夫だ」

隊長！もう限界です！。なにを諦めている！ここで諦めれば世界は終わる俺たちがやるしかないんだ今は耐えろ！。だめです！全てのパラメーターがオーバーヒートを起こしています！。ええい！『お兄ちゃん』・・・だというのは化物か！！

「帰ろうかネプギア」

「はい、お兄ちゃん」

ぐっ・・・後はまかした諸君の健闘を・・・。隊長？隊長オオオー  
――！！！！

以上色々ぶっ壊れたプラネテューヌの一日でした

いさ！プラネテューヌへ！！（後書き）

今思えばこれをやる為にこの外伝を始めたかもしれない・・・ふう、  
次は戦闘あるよ・・・空とネプギアある意味で相性最悪かも・・・  
空は昔を見てきたからね。さて日本一というタイミングでだそう出  
来ればがすともだしたいな・・・そう言えば色々とした理由で有料  
コンテンツをダウンロードできないファルコムのは戦いはユーチュー  
ブみれば大体分かるけど・・・ケイブの武器って良く分からない・・・  
・戦い方も良く分からない・・・誰か教えてー！！！！

朝のひと時（前書き）

タイトルまんまです

## 朝のひと時

「おはよう」

「おはようこうちゃん」

俺はネプテューヌを協会に送った後、空が戻ってこないから適当な宿屋に泊ろうと考えたかイストワールと偶然鉢合わせ今日はここに泊まりせんかとお誘いを受け迷惑じゃないのかと聞いたがネプギアもむしろ泊まって・・・みたいな瞳で見られ結局泊まることになった・・・っで俺が目を覚ますとそこには俺の腹に乗っているネプテューヌの姿だった

「昨日はお世話になったね！ありがとう」

「ちゃんと食った後は歯磨きしろよ？」

「こうちゃん私は睡眠欲という強敵に勝てないよ・・・！」

人の三大欲求の一つだしまあしかたがない・・・じゃ駄目なんだネプテューヌ

「じゃ、その時は頬を思いつきり抓ってやるよ」

「ええ〜もつと優しくしてよ！例えばさ『ネプテューヌ起きろ俺が見飽きてないだろう』とか・・・キヤー！」

なに一人で言っ一人で暴走するんだ？あとそろそろのいてくれな



いか別にお前が重いというわけじゃないんだが・・・

ガチャ

「お姉ちゃん？お兄ちゃん？起き・・・」

入ってきたのはネプギアだった俺達を見た瞬間口が止まり顔が急激に沸騰していく

「し、失礼しました！！！！！！！！」

電光石火の如く部屋を飛び出すネプギアに俺達に頭にクエスチョンマークが浮かぶネプテューヌが俺の腹に跨っているだけなのに・・・はて？

協会の中を歩くとても綺麗だった。これも清掃員の日ごろの行いの結果だなと感心しながら進む思えば他大陸の協会にこんなによつくりしたことはないな

「今日の朝ごはんなにかな〜？」

俺の腕を掴み左右に振るいネプテューヌに

「……………」

顔を真っ赤にしながら俺達の後ろについてくるネプギア

「ネプギア〜？どうしたの？」

自分の妹の異変に気付いたのか声を掛けるネプテューヌに要約ネプギアが口を開いた

「あ、あのお二人は恋人なんですか!？」

恋人？そんな仲じゃないだろうだいたいネプテューヌのような美少女が俺なんかと吊りあうわけないだろう俺達どちらかと言うと・

「・・・そうだねネプギア私達は「戦友だな」そうそうそうなん・  
・えっ!？」

「お互い困った時に支え合ったり助けあったり笑いあったり一緒に戦ったり俺にとって大切な奴だ」

ネプテューヌが居なかつたらとか思うとぞっとするようなことも旅の間でいっぱいあったからな

「うう・・・嬉しいけど嬉しくない・・・!」

「そっ、そうなんですか・・・ほっ」

俺の話を聞くとネプギアは安心のため息をネプテューヌは「うう」  
とか唸りながら俺の足を蹴ってくる。辞める痛い

「じいちゃんさまでした」

朝食はイストワール作で美味しかった小さい身体に大変だと思つので凄いなと思う

「おいしかったよ！いーすん」

「そうですかそう言ってもらえたらうれしいです（\*、\*、\*）  
美味しいがどっかで味わった感じな味付けなんだよな・・・はてどこで？」

「いーすんさんって色々できますよね。誰かにおしえてもらったんですか？」

ネプギアの問いかけに目を閉じなつかしむようにイストワールは口を開いた

「ええ・・・空さんから」

「へ、そうなんだ」

そうか道理でイストワールの味付けを味わった気がするんだ・空  
お前自分でああ言っておきながら親らしいことしているじゃん

「女の子だからおしめと嗜みは必要条件！って教えられました・  
ちよつと敵しかったですね」

「本当にあの人、親なんだ・」

ネプギアは誰か分からなそうな顔しているが一応会ったぞ敵意向け  
られたけど・それにしてもまあなんていうかあいつ自分で言っ  
ておいて矛盾しているぞよくに言うツンデレ？の一種か？

「じゃ、そろそろ行くか」

食事済んだしそろそろ空が来るだろうといつものコートを羽織る

「どこに行くの？モンスター退治なら付いていくよ！」

「・・・あ、中々強いらしいぞ？」

お前らが結束して倒したゼクスよりちよつと弱いらしいが

「ふふ、この頃対したモンスターが少なくなってきたからつまらな  
いんだよね・・・こうちゃんが来たってことはそれなりに強いモン  
スターを討伐しに行くんでしょ？」

ネプテューヌにしては中々鋭い恐らく俺一人になるだろうしいいか

「じゃよろしくな、最初に言っておくがあのゼクス並に強いみたいだから」

「そんなモンスターがなんで居るの（ですか）！？」

ネプテューヌとイストワールが声を合わす空に言われた俺みたいな反応だな。俺は四大陸に空がもしもの為と封印した四体のモンスター―の事を話すため息をつかれた俺だっつつきたいよ

「あの・・・全く話に付いていけないんですけど・・・」

「ネプギアがもう少し大きくなったら分かるよ・・・」

正確にはあいつの滅茶苦茶差に付き合うことになったら分かるぞ



## 朝のひと時（後書き）

空ツンデレ疑惑・・・どうですか？正直者じゃないからね・・・な  
んかおかしいな

今回も短くてスイマセン。次回は戦闘に持っていきたいです。では  
では

ME-GAさんがなんとゼクス、空、紅夜を書いてくれました！み  
てみんな載っているので興味のある人は是非是非！！！！



勝負！『炎獄凱アマテラス』（前書き）

ぐだぐだ・・・です

勝負！『炎獄凱アマテラス』

空が印を元にネプテューヌとある森にくるここには少ないがモンスターが出現するが俺たち二人の敵ではない紅曜日 of 錆となつてもらった

「ここに封印されているの？」

「あいつが言っている限りはな」

森林が並ぶ以外は何もない近くにもなにか祀られているとか怪しい洞窟とかそんなものはない

「・・・来たね」

しばらく歩いていくと木に寄りかかっている空を発見するこちらを見た瞬間警戒されるがやはりネプギアが居ないことが分かるとすぐに警戒を解く

「おはよう空ちゃん！」

「おはようネプテューヌ」

俺がどえらい目に合った（一話）を気になぜか女神たちと共感し仲良くなった取引らしいことでもしていたような気がする

「なあ、空どこにモンスターを封印しているんだ？ここには木しかないんだが」

見渡す限り木、木、木どこにも特徴的なものなんてない

「あのね・・・そんな危険なモンスターここに封印されていますよ  
くなんて目印合ったら大変でしょ？」

ため息付きながら言われたただ確かにそうだが気を鋭くしても何も  
感じないんだが

「紅夜の実力でも分からないように嚴重に封印したんだよ・・・さ  
て用意はいい？」

「私はOKだよ！いつでも掛かってこい！」

「俺もどんなモンスターなのか楽しみだな」

「ふふ、まずは『天地は操作され因果は留まる、その結末は無きも  
のでありさすればそれは不滅である黄昏の時間はここに来れるー  
ーテラフォーミング・アトラクション』！」

空を中心に曼荼羅のような複雑な術式が展開される魔法だとは分か  
るが全く意味が分からない。見ている景色すべてが歪み全てが再構  
築されていきいつもの俺たちが先ほどまで見てきた光景に戻っていく

「ねえねえ何の魔法？」

「この魔法はね結界魔法の一種でここら辺の全てを結界でつつんで  
その中の因果、時間、空間を掌握して全て操作してながあっても  
自分が決めた結果は操作する人の自由、勝っても負けても何度も挑  
戦可能なさ！」

「……えつと……」

空、ネプテューヌにそんな説明じゃ分からないと思うぞ

「ようはいくら暴れても問題ないってことだ」

……なんて結界だよ。これ俺がお前を戦う時に使われていたら俺に勝ち目なかったぞ戦う以前に勝敗自体が相手の思い通り勿論この結界で起きた結果は全てはいま空の手の中にある俺たちがもし負けても戦い自体を無かったことにも出来る……チートだ。結界壊し専用の武器でもなければ詰んだも同然だな

「さてさて、一応モンスターの特徴を説明するね名前は炎獄凱『アマテラス』灼熱の身体を持っていて物理的攻撃は弱点以外は効かないと考えておいて因みに弱点は自分達で探しててね。正直こいつ弱点さえ分かれば大したことないなつだから、一応紅夜冥獄神化と全負同調許可ただし三分だけ。質問は？」

「え〜物理が効かないなんて卑怯だよ〜！」

確かに俺は少なからず魔法を使えるから行けるけどネプテューヌは物理一色だからな仕方がないかもしれないけど、そう思いながら俺はネプテューヌの頭を撫でる

「いや、弱点され見つければいいって話らしいだろ？いけるさ俺とネプテューヌならな」

「ん〜 そうだね！私たちなら出来るよね！」

気持ちよさそうに笑みを浮かべるネプテューヌに頬笑み紅夜そしてそれを見て睨むように目を細める空

「……………もういいですか？」

なぜか敬語で威圧感を出しながら問う空、目がどろどろとしていた。とても怖い

「……………ええ、いつでもいいわよ」

ネプテューヌも女神化して自分の得物を持つ俺も背中にある紅曜日  
の柄を持ち同時に緋壊螺を抜けるようにする

「さすがに死にそうになったら手助するけど……………まあ大丈夫で  
しょ、じゃ頑張っつてね！」

なにもない空間に拳を叩き込む空それと空間に亀裂が走り鎖で縛ら  
れた扉のようなものが出て来る

「いかにも……………って感じだな」

その呟きと共に鎖が引き飛び扉を突き破り炎の手が俺達目掛け突進  
してきた。ネプテューヌと俺は左右に飛びその一撃をかわす炎の手  
は地面を焦がしていた

「いきなりね」

「せめて全貌を見せてほしかったな」

その瞬間扉が吹き飛ぶその欠片がこちらに飛んできたので紅曜日を  
抜刀、全て切り捨てる

「オオオオ!!!」

俺の願いが通じたのか全貌が明らかになる西洋の鎧を纏いその関節  
に火が溢れまるで火の幽霊が鎧を憑いたと思わせる姿だったその大  
きさは7mぐらいかな

声にならない咆哮のあと再び振り下ろされる拳その狙いはネプテユ  
ー又だったが彼女はその拳を避け鎧を足場にい気に跳躍し頭部の兜  
を吹き飛ばすがその中は炎

「……つち！」

アマテラスの怒りを買ったのか炎で形成された鞭がネプテユー々に  
振り下ろされる緋壊螺を抜き魔力を充填され込めた魔力を『水』の  
弾丸に変換させる！

銃口から発射された弾丸は蒼い閃光となりて炎の鞭を蒸発されそれ  
によりアマテラスの視線がこちらに向き今度は足が振り下ろされる  
すぐさま紅曜日を横にして巨大な重圧に耐える

「コウヤ！」

「大丈夫・夫！」

身体を魔力で纏わせ強化し一気に持ち上げる横になるアマテラスだ  
がその関節部分から幾つも紅い触手が襲ってくるすぐにその場を離  
れるが一つ一つ意思があるかのように独特的な動きで追い詰めて来

るが両手に緋壊螺を持ち水の弾丸を奴の予想ルートに連射し全ての触手を掃う

「それにしても・・・熱いな」

「そうね・・・ふう」

まるで太陽でも相手にしているような気分だ。アマテラスは吹き飛ばれた兜を掴み元の場所に戻す空だった兜から再び火が溢れだす

「弱点らしきところ見つかったか？」

「ダメね・・・外形にそれらしいものはないわ・・・あるとしたら中身ね」

先行してもらったネプテューヌの報告を聞いて頭を悩ませる・・・あの炎を吹き飛ばすほどの威力は緋壊螺にはない魔法はあるにはあるが詠唱が無駄に長い・・・昔の俺のバカ

「！！！！！！」

自分の攻撃を全て妨害されたのに遂に糸が切れたのか纏っていた鎧が吹き飛びそこから人の形をした炎が出現した・・・脱皮かよ

「本気・・・みたいだぞ」

「ふふ、腕が鳴るわ」

魅惑の笑みを浮かべるネプテューヌに苦笑しながら紅曜日を構える

「

!!!!!!」

全身の炎が爆発するように広がる俺はネプテューヌの前に立つ、走る紅蓮の後には全てが灰燼と化していくそれはまさに地獄への誘い



「……それがどうした」

その言葉と共に炎を一閃され同時に放たれた斬撃はアマテラスの半身をも切り裂いた

「この身に絶望……」

巻き上がる炎から出現するのは紅き神、冥獄界のもう一人のハード、全てを破滅させるゲームギョウ界の新たなる神その名は……

「この手に希望を……」

鮮血の（ブラッディ）信念<sup>ハート</sup>

「……………!!!」

切り裂かれたアマテラスに再び炎が集まるその中央には真紅に輝く球状の物体を紅夜は見た

「あれが弱点……か」

やはり中身に合ったかと内心で呟きアマテラスを睨む

「なら、あの炎の衣を取らないといけないわね」

隣で観察していたネプテューヌが呟くのに紅夜は頷き

「じゃ・・・行くか！」

掛け声とともに紅夜のバックプロセスが開き血色をしたノイズの翼が放射されネプテューヌと共に疾走する。アマテラスは自分の弱点がばれたと理解し空間を埋め尽くすほどの炎弾を撃つが

「風皇絶空・赫練！！！」

右足を軸に双剣銃を重ね渾身の力で振りぬき暴風を発生させ炎弾を吹き飛ばしそれはアマテラスが纏っていた炎すら吹き飛ばす露出するアマテラスの本体である球状の宝石すぐに炎を纏おうとするがそれは隠す様に前後から紅と紫の影が覆う

「虎牙破斬・顎！！！」

立ち位置を交代した二人が同時に剣を下ろすと半分には切られたアマテラス本体は命の瀬戸際に灼熱の紅薔薇を咲かせた

勝負！『炎獄凱アマテラス』（後書き）

結構普通に倒しましたゼクスより弱いつてしていたけどだいぶ弱い・  
・次回は適当にプラネテューヌで過ごさせてルウイーに行こうか  
な・・・

風皇絶空・赫練：ブラッディハート時に放つ強化した風皇絶空、あ  
りとあらゆるものを吹き飛ばす暴風で攻撃する

人は汚いものに嫌悪感を抱くことで初めて美しいものを崇拜できるb y空(前書

長いタイトルだな・・・

人は汚いものに嫌悪感を抱くことで初めて美しいものを崇拜できるb y空

「ふう……」

全身の力を抜き冥獄神化と全負同調を解除する地面に着くまで伸びた真紅の髪は白銀に脱色し装備していたプロセスユニットは虚空へと消えるすさまじい力だが未だに自分は扱えきれてないことに嫌悪感を抱くが出来ないことは出来ないと言いつつ割り切るしかないと思いつ分もいた

「こうちゃんは長時間の女神化は毒なの？」

「……まあ、お前らは信仰によって可能だけど俺は負の念を塊を信仰によって取り入れて強化しているからな、気が狂いそうになるよ」

思わず愚痴ってしまうんだけど希望はこいつ（女神）ら絶望は俺らが背負うのが仕方がないことと空は言っていたしこれはもう自分の力で克服するしかない

「はい、お疲れさん」

空間がぱっくり開きそこから出てきたのは同じ絶望を背負う役割である空の姿その手にはそこから買ってきたのか缶を手に使っていた

ネプテューヌ又は大喜びしながら飛び突き空に貰った缶をがぶ飲みする俺も渡された缶を空け中身を喉に通すひと汗かいたから冷えた飲み物はとても気持ちがいい

「結界解除・・・っと」

腕を振るうとガラスが割れるような音と共に世界が割れ元の世界に戻っていく

「これで一体目が・・・」

「先はまだまだ長いよ」

あと三体、ルウィー、リンボックス、ラストイションとなる別に世界の危機でもないのびのび出来るがそんなならだらししていたら空の逆鱗に触れそうだ

「今日はプラネテューヌでゆっくり休むといいよ」

「ん？そうか、いいのか？」

今日一日休めるとかなり嬉しい昨日も休みみたいだったけどな

「けど・・・一つだけいいかな？」

「なんだ？」

「もしだよ・・・もしレイちゃんが迎えた結末の逆の物語があったら紅夜はどうする？」

神妙な顔で聞いてくる空、レイさん・・・レインボーハートが刻んでいった歴史は惨く人の欲望に吞まれ殺されたゲームギョウ界の最初の物語、その逆と聞かれ思わず眉を細める

「えつとどうこと?」

女神でもあるネプテューヌが加わるその質問は聞き逃しのできない内容だった

「・・・争いのない世界、そこに競争もないそして発展もない」

重々しく口を開くもしも(・・・)のゲームギョウ界を見てきた空が呟く

「その世界に暮らす人々は漫然と怠惰な日々を過ごし、やがて衰退していく・・・そして滅んでいく」

確かに逆だ、人の欲望の暴走が女神を殺しそして世界をも殺す結果になっただがその話は人々が一つに統一され空の言った通り競争も争いもない毎日が意味もなく過ごしていく

「そんな世界があつたの?」

「・・・」

その問いに空は何も答えないうただ後悔するようにもしくは怒り感じさせたりただ失念するように無表情で空を見ていた

「女神はどうした?」

その沈黙は肯定を意味するであろうだから聞くもしそんなゲームギョウ界があつたとすれば女神はその時なにをしていたんだと

「後悔していたのかな・・・結局、友達も、家族もみんな居なくな

つての平和だったから・・・たとえ世界を変えたいと思いついて結果的に変えられたとして人々はそれを受け入れるかの適否していたのか・・・それはもう確かめようもない過去だね」

「・・・そうか」

なんとなく空がネプギアを嫌っていた理由が分かった気がした。いや・・・最終的に何もしなかったとある女神に対して敵意を出していたのか

「ぶん殴る、相手が女神であつても俺からしたらそれは間違つた方向だと思つているから目を覚めさせるどんな犠牲でも結局変わらないうならただ突き進むしかないだろ？」

「それが出来ない女神の限界はどう？」

「はあ、空これは言えるぞ。他人が決めた限界を自分の限界と思うのは高慢な態度だぞ。どんな存在でも千差万別に誰だつて可能性はあるんだから」

「・・・」

「そもそも限界は自分も他人も決める所じゃない。己が己を超える為の目標に立ちふさがる壁が限界と呼べるものじゃないのか？」

ただ空を見るととても綺麗で青白の景色が広がっていた

「・・・あの女神も他人を頼れば結果は変わっていたかもしれないね」



「何か言ったか？」

「いや・・・過去を見ても明日は来ないってね・・・そう思ったんだよ」

難しい話を並べ半分程度しか理解してない横にいるネプテューヌに苦笑しながら俺達はプラネテューヌに帰った。空は用事があるとかで別の方向に行った

「ネプテユー又さんいますか？」

開いた本に座る妖精を思わせる容姿をしたいイストワールがネプテユー又の部屋を訪れる反応はないがなんとなく人の気配を感じる

「あ、いーすんさんどうしたんですか？」

素振りでもしてきたのか額に汗を浮かばせるネプギアが偶然立ち寄る

「ネプギアさん・実はいますぐに決裁していただきたい書類があるんですがネプテユー又さんはお帰りになっていきますでしょうか？」

空の先導のもとモンスター討伐に向かった三人だが未だに帰ってきているところを見てないイストワール

「えっと、私もちよつと分からないです」

「そうですか……」

とりあえず人の気配がするのでドアを開けてみるそこで二人が見た物は

「……後でいいですか」

「……そうですね……羨ましいな……」

静かに会話し静かにドアを閉めるそこには……

「すう・・・すう・・・」

お互い手を絡ませ頭を重ね安息の呼吸音で目をつぶっている二人がそこにはいた



「・・・・・・・・」

上空を滑走する白き影、人ではとても追いきれないスピードで飛ぶ  
目的地へ飛ぶ

「?・・・・・・・・」

足を前にし急ブレーキを掛ける彼の目の前には立ちふさがるように  
六対の翼が広がっていた

『よろしいのですか母上』

15mはする巨体が囁くその声には戸惑い、混乱、現し心かという  
思いが込められていた

「・・・・・・・・」

『あなたがしようとしていることは未来の道を一つ削ることです。私は確かに今の女神を信じていますが・・・今の候補生に期待はできません・・・彼女達はまだ幼すぎる』

それはそうだ計算ではあと五年後にまたこの平和は崩れる混沌へと墮ち人々は希望を求めまた物語は始る

「そうだね。でも紅夜の志は本物だから・・・だからもう、あの剣は必要ない」

女神が女神候補生がそれを支えた人間たちでさえどうしようにもないあの未来に使われた女神の生命を力に神さえも殺すことが可能なあの魔剣はなぜ紅夜という存在がいれば不必要だとそう思ってしまう悲願してしてしまう

『・・・後悔はないのですか？』

「・・・ゼクスが思うような結果になれば僕はみんなに怨まれよう僕の本来の力を使ってどうにかするよ」

その言葉にゼクスに戦慄が走りそして理解する母上（空）は本気だと

『よろしいのですね？』

「うん」

再び空を滑走しゼクスの肩を過ぎ通った瞬間ゼクスはその大きな身体を半回転させ空の隣に立つ

「ゼクス？」

『見届けますあなたが初めてレインボーハート以外の女神に期待しましたそしてその結末を私は見届けます』

思わず空はクスツと笑い本当に大きくなったものだと思心喜ぶ自分の事を親として呼んでもらうことに未だに背中が痒いがとてもいい気分だ

付いた先はモンスターが占領してしまつたとある城、錆びているドアを一蹴りその瞬間、先住民が襲モンスターってくるが全て無敵智の刃の餌食となつた

「到着つと・・・」

空たちの目の前には行き止まりと思わせる壁そこには何も無いが空が指を鳴らすと空間に割れそこから鎖で縛られた扉が出現した

『私が実物をみるのは初めてですね』

「気を付けてよ。ゼクスの存在はハードに近いからもし傷つかれることがあるよ・・・喰われるよ・・・」？

鎖を切り裂き扉を開く因みゼクスは本来の大きさから空より頭一個分くらいの大きさに小さくなっているさすがに大きすぎるといふことで空が昔、収縮魔法を教え少し身体に負担が掛かるがゼクス自体本来の大きさがしつくりと来るのであまりこれは使わない

「・・・」

入室する一同なにもない部屋の中で一つ祭壇に刺された無装飾の剣

『これが、神を要求する未来』  
ゲハバーン

変哲もないただの剣だがこの剣は女神の最大の天敵である武器であることをなんて知っている人物はほばいない。空の持つ無叡智が消え再び現れたのは剣のような、突撃槍のような紅い刃に黄金の美装がされた無名の剣

「……これもゲームギョウ界が作ったと思わば認めざる追えないけど……嫌いだね……!」

城全体を揺らすほどの魔力その全てが一点へと集中するその一撃は天地を切り開く!

「嫌いだね、『女神』を糧に『神』を殺すこれはああああ!!!!」  
「!!!!」

———天地乖離す開闢の星  
エヌマ・エリシュ

それがゼロハートとして夜天 空としてずっと溜めていたのを弾けさせるような暴力と越流が全てが流すその過ぎ去ったあとは無為自然だけがなにもなかったように一輪の花を咲かせた





人は汚いものに嫌悪感を抱くことで初めて美しいものを崇拜できるb y空（後書

ちよつと日常？入れて原作のBADエンドフラグを根元からへし折りました！あの剣さえなければ・・・あとは紅夜君が頑張ってくれらるでしょう！大体はmk2は決まったんだけど・・・とにかく暗い・  
・もうちよつと修正（妄想）しようか・・・次回はルウィー！あの双子はでるのかな？というより原作五年前だから・・・アレ原作何歳だろう・・・10歳くらい？

紅夜とネプテューヌの昼寝の1コマをMA・GAさんが描いてくれました！みてみんで公開されているので是非見てください！！

いざ！ルウィーへ！！（前書き）

新キャラ登場！

でも期末発表に入ったから更新スピードがガク落ち

いざ！ルウィーへ！！

夢見る白の大地『ルウィー』そこは他の大陸とは違い魔法文化に発達しているそして最も寒い大地でもあり夏を覗けば一年中雪が降っているといっても過言ではないだろう。勿論外とても寒いが雪を使った遊ぶができることができる。ネプギア達に別れの挨拶を済ましプラネテューヌを出た俺達は中央協会に向かって足を進めていた

ザクザクと雪を歩みながら草木を隠す白銀の光景がただ広がる空は珍しく何もしゃべらないただ白が支配する空間を進むこうなると大体空は昔の記憶に浸っているパターンなんだっけだったらあまり話しかけない方がいい空のゲームギョウ界の記憶は幸福と不幸がねじ合わさった残酷なものだったから

「・・・・・・・・」

自分も考えるここで俺は人間を捨てた・・・正確には自己暗示を解いたと言った方がいい元から人間じゃなかった俺はただ人間になりたい人間であってほしいという願望の塊だった。ただ人を救ってそれで終わりの自己満足で合った自分を破壊したのは間違いなくこいつ（空）だろそういう意味では俺はこいつに救われたのかもしれない

そして今は思い出せない俺に似た誰かが俺に語っていたこともうなにも思い出せないけど悪い気分ではないことそれだけは身体が覚えている

「・・・・・・・・」

そんなとき同時に足を止めお互いの思考を止める敵意は感じないが視線を感じる少しの沈黙の後、空は突如ルートを変更し道なき道に歩みだした木が揺れ雪塊が降るが難なく避ける視線を前にしたままで空の構え『夢幻ノ無花果』は常に発動中らしいな

「どうしたんだ？協会はこっちだぞ？」

「ちょっと……ね」

そう返し足を進める空に疑問を抱きながら付いていくことにした。感じた視線が気になるかと思ったがこんな昼時にこんな場所に来る人は俺と同じハンターぐらいしか思い付かない

暫く進むと二つの人らしき影を見た

「らむちゃん、こっち……！」

「ろむちゃん……ここあぶないよ……」

と幼い声が聞こえたここには一応モンスターが生息しているはずだ

「ロムにラム……！。はあやっぱ、フラグメイカー（紅夜）の近くにいとこういう出会いもありますか……」

ため息を付きながらロムとラムと呼ばれた少女に近づく……お前が動いて俺は付いてきたんだけなんだが

「……………」

その時、空は初めて構えた（……）両足を直線に並べ右手を真っ

直ぐ突き立て左手は顔の後ろに真っ直ぐに伸ばしそれはまるで一本の『刀』を連想させる構えだった

「……っておい！」

「空虚刀流・奥義」

直ぐに止めようが遅し伸ばした手は虚空を掴む

「にげっ……」

直ぐに二人に危険を知らせようとするが二人を覆うようにこの辺りに生息する狼型のモンスター『アイスフェンリル』が牙を剥いていた

「『花晨月夕』……！！！」

生光の煌めきのごとく斬撃がモンスターの牙を肉体を魂をも斬った

「……ふえ？」

二人の幼女が呆然とその場を止まる自分の視線に知らない人が飛んできてから当たり前か……切り裂かれたアイスフェンリルは衝撃波により血飛沫を吐きながら天の彼方に飛んでいく

「紅夜、このぐらいのモンスター察知できなくてなにを守る気？」

「辛辣なお言葉どうも……えっと大丈夫？」

声を掛けるとびくっとお互い抱きつき震え始めた……俺怖い？

「空虚刀流・紫雲英!!」

「ぐへえ!?!」

横から容赦なき回し蹴りを腹部に叩き込まれる突然の事に受けの体制が出来ぬまま木に激突し雪に埋まるという二重災害・・・おれ・・・なにをした?

「まったく・・・こんだけ小さい子供にすることはまず視線を同じくらいまで下げる!自分より高い奴がいきなり喋ったら怖いに決まっているだろう・・・ブツブツ」

既に埋まっている自分の友に文句を呟き腰を下げ穏やかな声で空は口を動かした

「こんにちはは僕の名前は夜天 空、君たちの名前を覚えてほしいな」

「・・・ろむ」

「らむ・・・」

警戒心はいまだ健在だが自己紹介を済ませることに成功した空

「君たちがここに来た理由は?ここ危ないこと知っていた?」

できるだけ優しく語りかけるその問いにやはり(・・・)ラムが答えた

「ペン・・・まちにおとして、おねえちゃんにかっつけてくれただいなものだから・・・」

それは自分の知っている（・・・）ラムではないがまだ幼いのでもう少し時が過ぎれば性格が分かれていくだろうと空は考えたため息をつき紅夜に念話を送る

『ええ〜生きているなら返事しろ死んでいるなら冥獄界のモンスターの餌にするよ。どうぞ』

『さらりと怖いこと言っな！ってか俺悪いことしたか！？』

『存在自体が悪いよ、呪われるほどに（モテない男に）』

『まさかの存在否定！？なんで俺呪われるほど悪いことしたか！？』

『気がついてないのなら君はもう少しでフッフ・・・』

『なにその意味ありげの笑声！？青い鬼が住んでいる家にも放り投げられるの俺！？』

『お、その案いいね死なない人をあそこに突っ込んだらどうなるか気になっていたんだよ』

『全力で反撃するぞ？』

『それは色々バランスがおかしくなるからダメ』

『俺はお前の道具じゃないぞ！！！！』

『そつだね駒だったね』



『ひどいなお前！！！』

『いや〜やめてよ。照れるじゃないか』

『鬼！悪魔！隠れドS！拷問器具マニア！腹黒オカマ！破壊神！！』

『にははははは・・・っでコントは終わり僕はこの子たち連れていくけどいまごろ血走目で探しまわっているブランにでも報告しておいて〜』

『ちよ、おい！！！』

ほかにもいろいろ言っている紅夜を無視してラムとロムに差し出す・・・これ西沢・・・だれだっけ？ときな名前の立ち位置だった気がするけど

「ここは危ないから僕と一緒にいかない？」

そう言うと小さくて少し暖かい手を握ってくれた二人ほんと特定の人の心をがっしりゲツチュする顔と体系だなと思いつつ空は二人を引きながら森の中へ消えていた・・・幼女誘拐じゃないよ？これ重要



「・・・俺の扱いひどくない？」

雪から抜け出しさびしく響く、くしゃみするのはこの数秒後である

## いざ！ルウィーへ！！（後書き）

この物語で空の軸？になる武術『空虚刀流』・・・簡単に言えば空が虚刀流を自分なりにアレンジした剣術です基本は変わりませんが威力とか鋭さとかヤバい（作者の遊び心です）。mk2では使われない・・・使うと思うほど相手が・・・です。

前書きでも書きましたが期末発表に入ったので更新げき遅になりました。すいません

さて・・・ここから実はアンケート？みたいなと言いますか少し告白します実はですね落ち考えて無かったですよ新作によって変更するかもしれないか

ベールをメインに回したのもリンボックスなら物語回しやすいろうと思った考えだけです・・・友達に「そんな理由だったの！？」と驚かれましたハハハ・・・MAGGAさんの書いてもらったイラスト見ながら閃いてしまったんですよね・・・誰落ちまたは寄りとか考えてなかったの・・・みなさんはハーレムがいいですか？それとも誰か落ちがいいですか？

ということだ

ハーレム落ちか

誰か落ちまたは寄りか（誰がいいとか出来れば送ってきてください）

前作のようにラスボスぽっこして終わるかどちらがいいですか？

11月26日の夜12時までご迷惑お願ひします

気持ちはよく分かる(前書き)

・・・期末中なのに俺何やっているんだろう

## 気持ちはよく分かる

「……………」

山の頂上に建てられている中央協会その一角でそわそわと同じところを回る女性と読書をしている若い女性が座っていた

「ミナ……少し、落ち着いたら？」

読んでいる本から視線を外した少女は眼鏡を付け長い髪をした女性に言う

「で、でも……！この周囲はモンスターが生息しているんですよ！もしなにか合ったら……！」

「この前、大規模に掃討したからよっぽど隠れるのが得意なモンスターかしぶといモンスターしか残ってない。それに遭遇する可能性は少ない」

そういうこの地の守護女神ブランはこの教祖である西沢ミナに落ちつけと言うがミナの顔色は変わらない元を例えば親代わりをしている自分が目を離れたのが原因だからだ

「……………」

ブランも口では言っているが動揺をしているのが目に見えている本を読んでいるように見えて実は本の向きが逆である少なくとも逆から読書する人物はそうはいないであろう

コンコン

「誰です……?」

こんな状況だれかと思い少し強引に空けるがそこには誰もいない

「……コウヤ?」

ブランは音源を掴みその方向に向くそこには窓をたたく紅夜の姿があった

「久しぶりブラン」

「久しぶりというほど時間は立っていないけど……久しぶりコウヤ」

まずはお互いの挨拶からこれ重要だな入ろうと思ったが皆さんぴりぴりしていたので話しづらく回ってきたのであった(これを人は不



法浸入という)

「あなたは・・・あの時の・・・」

「えつと・・・誰ですか？」

眼鏡をかけたいかにも図書館とかで司書とかしてそうな服装の人は  
て誰だろう？

「申し遅れました私は教祖をさせていただきます西沢ミナといいます。  
あの時はお世話になりました」

と、丁寧に頭下げられた俺何かしったけ？少し混乱するとブランが  
俺の袖をひっぱり補正してくれた

「あなたが協会の人を治療してくれたとき」

なるほど昔、空がまだゼロハートであったときギルドの過激派がこ  
こをせめてきた時、罪「死みたいな法則のゼロハートは殺戮した俺  
の言葉のおかげだったのか殺しはしなかったが過激派の全員は半殺  
しで病院送りにしたから俺たちがいなかったから数人は出血多量で  
死んでいたかもしれない。そのぐらいひどかった

「まあ、俺の義に従ったまでだし・・・そうだロムとラム？だて」

「ロムとラムを知っているのか(ですか)!!!!」

少し照れるので話を逸らす為に空に言われたこと言つとすると二人  
がいきなり迫ってきたあの二人は女神候補生だったのだったのか？

とりあえず今にでも食いついてきた二人をなんとか離しここにくる

途中で見かけ街に落とし物があるらしく二人で向かう途中を保護、そのまま空は二人に付いていき俺は安心でもさせるために報告しにきたと言えはなんとか二人は安心のため息をついた

「あいつならどんなモンスターでも大丈夫だ」

というよりあいつなら今のゲームギョウ界の全てのモンスターが襲ってきても笑いながら蹂躞できるだろう。結構マジで

「――光れ！ 夢の星（みつけだそう！） オーバーリミット！

「……うん？」

どこからか歌い声が聞こえ三人同時に振り向く

「――限界なんて超えてくよ きつと

空間が歪みその向こうに何かが走ってくる……嫌な予感しかない

「誰にも負けないから」

と同時俺の上空に黒い影が飛んでくる・・・はははこれバイク（・・・）だ

ドガガガガガッガ！！・・・グチャ

「ロム、ラム楽しかった？」

明らかに変な着地音だったが全く気にしない方向で空は後ろに抱きついている幼女二人に問いかける

「すっごくおもしろかった！」

「そらおねえちゃんのうたきれいだった・・・」

「ありがとう」

前輪からなにか潰したような感触がするが幼女二人の頭を撫でるペンを見つけてくる事ができた三人だったがさすがに再度歩いていくには体力が不安だったそこで空を飛んで行こうと思ったがそれじやつまらないということで空が使ったのはバイク名を『千足狼』と言つてとある神喰らいの狼の名前をしたバイクを元に作ったの空ご自慢の一品

「ロム、ラム・・・！」

「おねえちゃんただいま」

「ただいま・・・おねえちゃん」

妹達の帰りに安心する姉、妹達はそのまま姉の胸にジャンプ・・・  
西・・・誰だっけ？とりえず最下位ドジ教祖も安心した表情になる

「・・・お、い・・・ど・け・ろ・！」

さすが神になっても不正不死は健在、潰した感覚があるのにもう元  
通り『千足狼』を空間に戻し埃を叩きながら立つ紅夜

「・・・人間なら“チーン”クラスだったぞ？」

「ごめんね」

「・・・うあぁっあぁ！！！！（怒）」

紅夜が烈火の如く怒り斬りかかってくるが身体をずらし避けまだ振り切つてない腕を持ち回転させるように動かし足を掬う

「空虚刀流・一初・・・ってね」

そのまま投げ技を決め入って来た時に空けてもらったのである窓  
向かって投げる・・・カウンター投げ技成功

## 気持ちはよく分かる（後書き）

相変わらず扱いが酷い紅夜でした次は・・・絡ませれるかな？それとネプ（姉）×紅夜の短編書いてしまった・・・終わった後にでも流そうかな・・・

とりあえずどちらも更新がいつになるか分かりませんがどうぞよろしく願います！・・・

前回は長かったのでまとめて技紹介

花震月夕：立った状態から前方に向かって両足と右手を直線に並べ左手を顔の横に持つていい身体をねじりながらの突進技、最大加速時は音速の壁すら突き破りそれを直撃すれば斬り飛ばされる

紫雲英：呼び動作なしの鋭い蹴り奇襲に便利

一初：相手が何かを立てに振り下ろした時、専用の投げ技。振り切つてない腕を自然のままに回しながら足を蹴り体制を崩しそのまま投げる技

キャラクター紹介『外伝編』（前書き）

外伝は外伝で笑いをいれた設定を作ってみた

## キャラクター紹介『外伝編』

零崎 紅夜

一応主人公だが今日も副主人公にボコられる不幸体質持ちのイケメン少年

鈍感でヘタレでロリコンという三種の神器？持ち本人は否定しているがネプテューヌとかブランとか特に付き合い無いのに関わらず甘くないかと疑問が出ている

だがいざというときはとても頼りなり腕は女神さえも上回るほど家事万能で性格もいい欠点はあまりない

バトルスタイルは大剣と双銃のどこそこの魔剣士を思わせるがまだ彼処まで腕は上達してない

人間から禁忌を使い神へと変換した存在だがとある破壊神曰く『やっぱり不完全で1/3くらいは人間だから半人半神に近いとのこと』

因みに冥獄神ブラッディハートと言う名前その力は今の四女神が結束しても勝てる勝てないかだが勝敗がつく前に暴走すること暴走した場合はゲームギョウ界はまず滅ぶと考えられている。

ゲームギョウ界の未来が左右されるほどの力を手中に納めるためただいま努力中

今のところメインはベールだが変更あるかも（次作に合わせてノワールとか……）

妄想CV：梶裕貴

夜天 空

前作のラスボスこの小説内の頂点に立つ実力者とにかく強いだが本気は出すことはないというより出せない。危なすぎてそれと主人公の座を獲得している

実は一対一より一対多数戦が得意何故なら彼が破壊神だから  
見た目は絶世の美少女だが本人曰く『男女の概念がないから男でも女にでもなれる』とのことデフォは男なので男の娘？（顔は生まれつきらしい）

本人は隠す気でののか不明だがDS趣味は拷問器具収集と歌を歌うことかなり危ない彼のノリに付いていくには人外は絶対条件だが歌はもう何億も歌ってきたのかプロが弟子にしてくださいと土下座するレベルまで上手いただヴィジュアル系のような激しい曲は無理らしい

実は結構優しく芯が強い面倒見もよいので彼と友達なれた人はラッキー

ゲームギョウ界自体が生まれる前から生きていたのでかなり長生き、歳のことを迂闊言々と鉄の処女アイアンメイデンに容赦なく閉じ込められる。気を付けよう

彼女または彼氏（告白されたことは容姿の性で星の数ほどあるらしい全部断った）がいないが史書『イストワール』と、ある大陸を守護する超越竜『ゼクスプロセッサ・ドラゴニス』の一冊？と一匹？



の生み出したのではなく造り出したものだが親であることは変わりなし  
自身は親らしいことはしてないと言っているが嘘と思えるほど親らしいことはしているそして子煩悩『息子娘が欲しければ僕を倒してみろ』である（勝てる奴なんているのか？）  
なんか抜けていたり天然だったりけど頭がよかったり不思議子である  
若干情緒不安定で目がドロドロし始めたなら危険信号。死ぬ気で逃げる捕まったら何されるか分からない

妄想CV中原麻衣

超越竜『ゼクスプロセッサ・ドラゴニス』

名前が長いから皆からはゼクスと呼ばれている  
モンスターでありながらその性質は女神に近いとある神を封印している大陸を守護（監視）しているその大陸は今のところ誰も見ることない見ることがあればその時、大陸は一つとなり世界は混沌と化すとのこと

四つのモンスターに別れることが出来るが四つの思考に別れることなく四つでありながら一つと変わっているただ喋れなくなるので一つであることが多い

収縮自在の魔法を会得していて自分の元々の好きなサイズまで小さくなれるがリーチが短くなるとかリアルな問題があるのでこれもまた使用は少ない（人間化もできるらしい）  
ファザコン？マザコン？どちらでも正解だかとにかく自分の親である空を誇りに思っている。あとシスコン『イストワールを汚す存在は抹消してくれるわあああああ！！！！！！！！！！』と暴走しながらコメントをくれました。ありがとう

妄想C V 池田秀一

史書『イストワール』

この人物は原作キャラなので軽くオリ設定少々

造り出したのは空で本人曰く『昔は何の記録もない零からだっただから赤子同然だったそうだが昔の写真見る？これがまた可愛くていつめふよふよ僕の胸に抱きついてきて『おかあちゃま』って呼ぶんだよあのときは天国が見えたね出血多量でまた倒れたとき心配してくれて涙目になるイストワールとにかく萌えたね無邪気にスプーン持って『おいちい』とかさもうちの子お持ち帰りOKですか？つてねそれからまたあんないい子に育ってくれて今も十分可愛いだけとき。あつ、そうだが昔の写真あるけど見るこの頃のイストワールは（投げナイフ准将状態になったので切らせてもらいます）』

彼女のしつかりした性格は空の英才教育のお陰なのかもしれないゼクスは肉体的な英才教育

とにかくゲームギョウ界の頂点立つモンスター（ゼクス）と全世界No.3の実力者（空）に愛されるイストワールにもし手を出す輩がいれば地獄も煉獄すらも甘い恐ろしいものを見るだろう  
因み何だかんだイストワールもブラコンとマザコンである

一番好きだから一番遠くへby空(前書き)

前半日常だけど後半シリアス……

一番好きだから一番遠くへby空

「……どうことでもしよかったら協力してくれないか？」

前回のようなモンスター……アマテラスのような奴なら一人で倒すことはまず不可能に近い空は手助けはしていいよとは言っているがあいつの手を借りるのは負けた気がするので俺はブランに協力をお願いしている

「………」(コクリ)

しばらくの沈黙のあと頷いてくれたあとは空が場所に案内して封印を解くだけなのだが……肝心の空は

「そらおねえちゃんこれよんで」

「………」(ワクワク)

「ん？はいはいえっと……ね」

このようにこの地の女神候補生達ロムちゃんとラムちゃんに懐かれ動けない状況だやっぱ子育て経験があるからこういうことに慣れているのか？更に……

「あの夜天さん教えてほしいことが……」

ここの教祖西沢ミナさんはロムちゃんとラムちゃんの教育係もして

おり自分より経験がある空に色々教えてもらおうとしている・・・  
なんかこう見ると空は不思議とカリスマ性があるだろうと思っ  
てしま  
う

絶対的力と過去の豊富な経験に芯の強く話術も得意としその容姿も  
一度見てしまえば記憶に深く刻まれるであろう神々しい美貌に溢れ  
ている・・・あれこいつ上げてみるとやっぱりこいつは『神』だっ  
たな欠点らしい欠点がない正確に問題があるが

「・・・ロムとラムがあんなに楽しんでいるところ始めてみる」

絵本を読み聞かせている空とその読んでいる内容にワクワクした  
り笑ったりしているロムちゃんとラムちゃんそれを傍観するブラン  
の表情は少し・・・寂しそうだった

「姉としては不満か？」

「・・・そんなことない」

そっけない栞を挟んでいる本に手を手を伸ばし読書を開始するブラン  
のため息つく素直じゃないなとこれは家族的な問題だから俺が突っ  
込む必要はないと思う

「これいいか？」

「・・・一緒に遊んでいたら？」

これは少し拗ねているなと心の中で苦笑しブランの言葉を無視し隣  
に座り適当な本を取る簡単に目を通すとどうやらラスティシヨンの  
学者が書いた本みたいだ・・・作者は・・・サンジユ!?

「……ありが……聞こえてないみたいね……バカ」

内容をじっくり見ると人と機械についてそして発展していくラスティションが今どのように成長していくであろうと細かく自分の感想を含めた文章だどうやらあのままアヴニールは解体しサンジユは今、自分を見直す為もう一度学者の視点で生きているみたいだ……そして

「……そして私は自分を見直すことができたあの時の少年よ」ありがとう  
『』

それが最後の書かれている一行だった。

自分と言うちっぽけな存在が人を信じることができなく機械だけに執着して『人』を忘れていたサンジユがこんなに変わってくれたとても恥ずかしくとても嬉しかった

「紅夜、僕たちと雪合戦しようZ E  
」

「今本読んでいるあとにしてくれ」

いきなり横から感動している気分をぶち壊す破壊神（空）が誘って

くるが拒否

「・・・ロム、ラムちょっと耳貸して」

空がロムちゃんとラムちゃんを使ってなにか策略を練っているように聞こえるがどんな奇策でも俺はここから離れる気は1mmもない！

「紅夜〜」

「なんだ・・・！」

少しイラつきながら振り向くとラムちゃんロムちゃんが前かがみでこっちを上眼遣いでみてくる・・・俺は動かないぞ！

「「こつやおにちゃんあそんでくれないの？」」

「そんなことないぞなんでもしてやるぞ！！！！」

はっ！口が勝手に動いた！？

「はい、そんじゃ行こうか」

「ちよつと！待て！あれは言葉の綾とつやつでな・・・！！」

横のブランの視線が突き刺さる冷や汗が止まらない！

「へ〜〜紅夜は幼い子供の頼みを平気で無かったことにするんだ〜  
へ〜〜え〜〜男なのにな〜〜」

ぐぐっ・・・これが年の功とつや「ファラリスの雄牛で丸焼きにされ



たい？」「ごめんなさい

「「「「「？」「」「」「」

この世界にないものだからお前たちは分からないだろうがな拷問器具というより処刑器具じゃないのかそれ・・・

「細かいことは気にしない」

そのあと三人の雪豪雨（おもに空）の攻撃にはてばとぼっこぼっこになるのはもう仕方がないことしれない。ハックション！



「・・・寒い」

「温かいココアどうぞ」

結局一日中遊んで過ごして俺達は協会にお世話になることになることになったやっぱりが効く空に（お前の性だが）感謝しながらココアを受け取る。自家製でなのかコクが深くコーヒーでも呑んでいるようにその温かさが全身に行き通る

「お前は俺を弄るが好きだな・・・」

「うん大好き！」

星が出てきそうな笑顔に浮かべる空に諦めの念を感じ始めた

「……いや？」

「いやだ痛いし苦しい」

何をいまさら言っているんだこっちはお前の相手に命賭けてんだぞ？

「かつこいい男の子はそこは読むものなんだぞ？」

はいはい俺はお前が思うような俺じゃないんでね

「でも……優しい」

「……」

結局こいつがなにを俺に求めているのか分からないあっちは俺のこ  
とを俺より知っているが俺は空をよく知らない

「なあ……お前は何者なんなんだ？」

「それはゲームギョウ界の破壊神ハードじゃなくて僕の本来の破壊神とし  
てどっちを知りたいの？」

空気が変わった手が震える喉が異常なほど乾き俺は破壊神に吞まれ  
ていくそれは海の深淵のように暗くそして冷たいもの

「知らないほうが幸せなこともあるんだよ」

これ以上入ってくるなと拒絶するように空はその冷たい声で部屋を静める

「でも、大丈夫。僕は紅夜がどんなになっても好き（・・・）だから守ってあげる」

「だから早く強くなってほしいこれからのゲームギョウ界は僕の知らない未開の未来なにが起きても不思議じゃない」

「僕は根源は破壊だけ僕は全知全能じゃない守護なんて僕の対極なんだよ僕は紅夜の物じゃないゲームギョウ界意外にもいっぱい管理している世界がある」

「世界神としてゲームギョウ界だけ特別扱いをするわけにはいかなだから僕から早く飛び立って僕は育てることは苦手だけど壊すことは大の得意だから」

「だから早く僕が要らない神になるようになって」

愛想良く笑う空に俺は何も言えなくなつただただ空の言葉に耳を貸すことしか出来なかった。それしか許されなかった（・・・）

そう・・・ゲームギョウ界に夜天 空の居場所なんてとうの昔にこいつ自身が壊した（・・・）んだレイさんとの思いだけだけを残して

「はい！暗い話は終わりだよ明日はモンスター退治にいくからよろしくね！・・・！」

強引に話を切られベットに潜り込み空を見ながら俺はただ渡されたコップの中に出てくる渦を見ることが出来なかった

一番好きだから一番遠くへbY空(後書き)

暗いとにかく暗い……！  
なんでこうなった……

勝負！『天地喰フエンクロス』（前書き）

個人的にプランがキャラとして一番難しい・・・





「ここに・・・？」

「ばれたら大変だから全く目立たない所に封印したらしい」

俺の捕捉に納得したように頷くブラン、空は前に使用した結界魔法『テラフォーミング・アトラクション』を発動させ俺たちの前に鎖で縛られた巨大な扉が姿を現す

「今回は天地喰『フェリクロス』全身黒い毛を生やした狼で無属性なんだけど性格超凶暴で怪力半端ないからバラバラかぱっくりされないように勿論紅夜は前回と同じように冥獄神化許可ね」

今度はモンスターらしい奴なんだな、となると弱点らしいものはないからガチバトルになるな

「あなたは・・・？」

「見物、危なくなったら手を出すよ」

いかにも不満そうな顔になるブランまあ・・・空の手の中踊らされているようなものにも感じられるから分らんわけでもない

「それじゃ・・・頑張つてね」

いつものように空間に歪みを発生させ空はその中に入っていくと同時に鎖は弾けゆっくりと扉が開いていく

「あいつに躍らせているようで気が喰わない」

「はははは・・・」

ブランの眩きに思わず苦笑してしまう

「ゲルウウウ・・・」

底から這い上がってくるような獣声に意識を切り替える俺たちの前には空の言った通り黒毛の双頭狼が牙を向け出しこちらを睨みつけて来るアマテラスほどでかくないがそれでも昨日空が狩ったアイスフェンリルの5倍はありそうだ

「それじゃ、行きますか」

「叩き潰してやる・・・!!」

お互い得物を構えその充血した四つの眼をにらみ返し戦闘が始った

「  
！！！！」  
耳を隠してしまおうほどの大音量の咆哮と共にその強靱な爪と強固な牙をむき出し飛びかかってくるフェンクロスを横に飛び躲すと同時に腰の緋壊螺二丁を抜き発砲する

魔力で編まれた弾丸はフェンクロスの肉体を貫通までいかないが着弾するが全くダメージになっていない

ブランはその巨大な戦斧で斬りかかるがそれと同時に振るわれる爪が火花を散らした時もう片方の爪が煌く

「やらせるかよ・・・！」

緋壊螺を腰に仕舞って背中の中を紅耀日を地面に突き刺し一気に振りぬく！剣筋の通りに生み出された紅い斬撃はまっすぐフェンクロスの腹部に直撃するひるみこちらを向いた瞬間ブランの戦斧が唸りを上げ爪甲を砕いた

「お見事」

「まだ終わってない片方爪を潰しただけ」

こちらに舞い降りてきたブランを狙い怒り狂ったフェンクロスが全身を鳴動され突進してくる

「――！！」

一瞬の脱力に素早く緋壊螺を抜き撃つ俺の狙いは綺麗に決まりフェンクロスは道を外し俺たちがいない方の森へ頭から突っ込んだ

「……神業ね」

「そっか？真正面から来たから当てられたんだ」

俺が撃ちぬいた場所は目どんな生物でも弱点になる所俺は突っ込んでくるあいつの目を一つずつ（……）撃ちぬいたそのことで方向感覚が狂い俺たちとは別の方向に行ったわけだ……いきなり本番だったが相変わらず自分のスペックに驚くばかりだ

「グルウウウ……ガアアアアツツ！！！！」

全身の毛が剣山の如く逆立ち双頭の狼の覆う空気が一気に変わり濃い海でもいるような殺気に沈められる

「……こりゃ、凄いな」

全身から冷や汗が流れる圧倒的な『死』を感じる空間という牢獄に閉じ込まれた気分だ

「……っ！」

隣にいるブランもその殺気に吞まれ脂汗を掻いて手が震える俺はその震えを止めるようにブランの手を握った

「一緒に倒そう。帰ったらまた一緒に読書しような。だから……俺の背中を預ける」

俺の言葉にしばらく沈黙していたがブランは恐怖を振り払い再びその凜とした表情を見せた

「一気に行くぞ！ブラン！！」

「……分かった」

いつものブランに戻って内心安心しながら俺は変わる冥獄神『ブラッディ・ハート』として！

「……！！！」

咆哮と共にその爪牙を煌かせ突進してくるのを俺はその手に握る双剣銃を合わせ魔力を剣先に集中させる

「破滅せよ！レッド・オブ・サンシャイン！！！」

紅い太陽が発射され猛スピードで突っ込んでくるフェンクロスは回避できず着弾、大爆発を引き起こし空中に浮かぶ

「ブラン！」

「ぶつ飛べえええ!!!」

その隙にブランが腹部に戦斧を叩き込む頑丈なフェンクロスの肌も耐えきれず大きく斬られ吹き飛ば

「「これがお前あなたのの終焉だ!」」

同時に跳躍し地面に墮ちもがこうとするフェンクロスの真上へと飛び一気に急降下する

「「絶破神碎撃!!!」」

神すら砕くその一撃は大地を壊しその中央にいたフェンクロスは最後の断末魔を咆哮させその命を砕いた





「おみごと、あと二匹だね」

世界は変わり元世界に入れ返されるこの結界魔法にブランも興味深そうに見ていた俺はお疲れと渡されたタオルで顔を吹きながら折り返し地点にきたんだと少し感動する

「・・・コウヤ、行くの？」

捨てられた猫を連想されるつぶらな瞳でこちらを見上げて来るブラン・・・なあ空よ一年くらいここで休憩していいですか？

「却下」

「即答かよ」

「休みがほしければ僕の予想を超えてね」

そんな難題を・・・こいつは・・・

「まっ、今日はゆっくりしてよまたまた僕は用事があるからじゃあ  
ねっ」

またかよと思ったがとりあえず朝っぱらから疲れた

「一緒に帰ろうかブラン」

「・・・うん」

今はこの小さくて温かい手を握れるだけでいい、ブランも寒いのか  
顔が紅いから急ごうか首に掛けてある鈴のような音を聞きながら俺  
達は協会に帰って行った

勝負！『天地喰フエンクロス』（後書き）

勉強の合間を見ての更新グダグダ感ありありありません

基本無口、無表情のブランのキャラがとにかく難しいさてどうしようか・・・次回外伝だけのオリキャラ登場予定

レッド・オブ・サンシャイン：練った魔力を円状にして打ち出す技当たると爆発し相手を吹き飛ばす

絶破神碎撃：ブランと紅夜の協力技同時に飛びあがりお互いの最高の一撃を叩き込むその威力は大陸に罅が入るほど

空の従者×2登場！？（前書き）

タイトル通りです。短い・

空の従者×2登場!?

「さて・・・用意はいい?」

ロムちゃんやラムちゃんと遊んだりプランと読書したりした昨日はあつという前に過ぎ去ってしまリーンボックスにいく準備ができたところだ

「ベールやチカ、元気かな・・・」

あの二人なら仲良しだから心配ないだろうと思いつながら呟いてしまつ逢いたいな・・・

「・・・」

横で睨むようにこちらを見る空の視線を受け流しながら部屋のドアを開けるとそこにはロムちゃんとラムちゃん、ミナさんがいた

「もういつちゃうの・・・?」

「わたしたちともつとあそんでよ〜!」

「こら、二人ともコウヤさんも困らせたらいけませんよ」

まだ遊び盛りの子供二人に手を引っ張られ何とも言えない状況になる別に急ぎの用事ではないのでもう一日いてもいい気がするんだが・

「それは・・・無理かな？」

俺の思ったことを読んだ空が横から呟く空が一年とう期間の間に俺は強くないといけないからそれに時間はあんまりないとのこと

「まあ、一生のお別れじゃないし・・・しばらくは会えないけど」

これからリーンボックスとラストイションに行つて神界に戻つて修行とまた会える機会は少ないかもしれないな

「そらおねえちゃんはわたしたちのことくらい・・・？」

「いやね僕たちはこう見えて忙しいのまた会えるからさ・・・えつと」

なにか渡す物があるのか歪み空間に手を突っ込みなにかを取りだそうとしているときただならぬ気配を感じた

「・・・げっ」

珍しく空の額から冷や汗が流れ始める知り合い？でも今のゲームギョウ界に空の知り合いなんていたのか？

——見つけましたよ主人<sup>マスター</sup>

——空、見つけたぜ

風と一緒に流れてきた声と共に俺はみなさんを空はロムちゃんラムちゃんを抱え飛び出たその瞬間俺たちがいた部屋に誰かが天井をぶち壊して降りてきた

「は、ははは・・・久しぶり『タイム』『アリア』」

煙が晴れるそこにいたのは黒と白のメイド服とぜんぶ黒の執事服を着た二人

「おはようございます主人<sup>マスター</sup>さっそくですが・・・」

広大な海を見るような蒼き瞳と腰まで伸びた空色のくせ毛のない下ろされた綺麗に伸びた髪に不思議と目が向く気品と穏やかを感じる女性だった・・・後胸が核ミサイルかと思った、だってぱっと見で女神化したベールより大きいだもん

「拘束させてもらっぜ」

もう片方はに首に掛かる程度まで伸び烈火のように逆立つ紅い髪に夕焼けを見るような灼眼に中性的な気高さと荒々しさを感じる貌、メイド服を着た女性とはまたベクトルが違う女性だった・・・こっちは何も言えない寂しくて

「さて・・・僕がなにかしたかな？」

両手に抱えたロムちゃんとラムちゃんと下ろし俺もみなさんを下ろし何が起きてもいいように構える

「そらおねえちゃん？」

「行つて・・・ちょっと僕、拉致られるかも・・・」

「人聞きが悪いぜ空、聖奈様から連れてこいって言われてきたんだぜ？」

「いままでサボってきた分のお仕事溜まっております強制手段は取りたくありません私達と御同行お願いします」

「お姉ちゃんがね・・・どうせまたコスプレされるか仕事押し付けられるだよね・・・？」

空の問いかけに二人はそっぽを向いた肯定と見えるな

「貴方達は一体・・・何者ですか!？」

要約口を開くミナいきなり天井ぶち壊し入ってきた二人に問いかけ



る。二人の話と空の会話を聞く限り・・・

「私（俺）は破壊神の従者です（だ！！！！）」

だろうな。別に驚くべきじゃないチカの家系は代々ベルを仕える一族だって聞いたし聞く限り空はかなり高位の神と分かるからな従者一人二人いても不思議じゃない

「・・・逃げるが勝ち！！！！」

そんな事考えている間に空の行動は早かった床を蹴り最寄りの窓に飛びかかり脱出を図ろうとする・・・が

「甘いぜ！」

「うっ・・・ティム」

その手に火炎を宿らせティムと呼ばれた人は空に殴りかかる逃げ場所を壊していくように壁に空を追い込んでいく・・・凄い体術だ空を追い詰めてるタダものじゃない

「デカメロン！！！」

「私の名前はアリアです」

アリアと呼ばれた人が空に手を向けると空を空気が包み一瞬で氷像が形成された・・・特殊能力にしても氷を形成するのが速すぎる・・・相手にしたくないな



悲しき断末魔を上げ空は二人の術者と共に虚空へと消えた

「……………なにこれ」

異変を感じたのかブランが来るまるで嵐が過ぎ去った光景に思わずため息をつき……

「今日はいい天気だな」

ラムちゃんロムちゃんはなにが起こったか分かっていないような顔でミナさんは状況処理に頭いっぱい。ブランは壊れた天井を見つめる。今日もお休みだなこれは



空の従者×2登場！？（後書き）

ばいばい空君は一話くらい休憩だだよ次回はプランにロムラムとちよっとミナの日常やりたいな・・・また短くなると思うけど

雪の国の日常（前書き）

テスト終わったああああ！！！！（二重の意味で）

## 雪の国の日常

「……………」

「……………」

暖炉の火が煌くように燃える。本来なら今日リーンボックスへ出発するはずなんだが仕事サボっていたらしく空は拉致られ今日もルウイーで過ごすことにした。その気になれば一人でリーンボックスに行けるが大海原に超えられる自信がない移動は空の空間移動頼りだったので余計に、横に視線を泳がせば自分と同じように羅列する文章を読むブランの姿があった

いつものコートと帽子は壁にかけてあり軽い服装になっているブランはベットに寝転び本を静かに呼んでいる俺もこんなゆっくりとした時間は久しぶりかもしれないと思いながらまた一ページを捲る

「コウヤは・・・本が好きなの？」

唐突にブランが口を開いた。好きか嫌いかと聞かれれば好きに入る本によってはたくさんのことを学べるからだ

「まあ、好きだな。為になる」

「そう・・・」

そう答えるとブランは本棚から何か取り出したタイトルは……  
裏切りのイストワール』？」

「……なにこれ」

「私が書いた本、感想をおしえて」

タイトルがあれだがとりあえず読んでみる

「……うん……中々個性的……で面白い……ぞ」

手早く読み終えた本をブランに返す良く言えば個性的悪く言えば下手

「私もこれは自信作だと思う……」

売れないと思うが……というより売るな本人が見たら苦笑いで済むと思うが……あの子煩惱は……

“……クスクスクスクス……killーウー”

「顔面真っ青だけど大丈夫？」

「ああ……」

あいつに冗談通じるか？でもあれモンスターペアレントレベルかも



しれないし・・・逆鱗に触れたらなにするか予想できない！・・・  
そうだ！！

「あのほら、出て来るイストワールなんだけどリアルのイストワールに似ているじゃないか・・・さすがに本人の許可とかないと不味いんじゃないかな・・・？」

「・・・確かにそうね名前だけでも変えておくわ」

セーフ！セーフ！！ある意味九死に一生を得たかもしれない本人無自覚だけど！！！！

「おねえちゃん～！おにいちゃん～！あそぼっ！！！」

ドアが強引開かれそこからラムちゃんロムちゃんが姿を現す

「ん？ああ、分かった。ブランはどうする？」

掛けていたコートを羽織るまた絵本かそれとも雪合戦かどっちでもいい

「・・・私は読書で忙しい」

ブランの反応に接し方が分からないと見えるまあ・・・そんな姉妹もあるのかなと少し残念そうなロムちゃんとラムちゃんと一緒に部屋を出た

白みがかかった青の空からふらりと降ってくる粒、白銀に染まった  
世界の中で俺はただいま頑張っております

「え〜い！」

「・・・えい！」

なんとか子供は愛くるしいそして和む迫りくる雪玉を避けながら

そう思う・・・勿論数発はわざと当たるよ？だって全弾避けたら作る方が可哀そうだろ？幼き双子が楽しそうにする表情を見れば疲れなんて吹き飛ぶ・・・カメラかなにか実家から持ってこればよかった。雪は解け始めると硬くなるのでそれをぶつけると危ない、なので軽く包んだ雪玉で反撃する顔は勿論狙わない風邪でも引いたら罪悪感で俺の心は潰れる

「・・・つま、こんな日もいいよな」

思わず呟く昨日もそうだったがこんな日常的な日も悪くない勝ち取った平和と言つべきかとても気分がいい

「・・・あいた」

思考に没頭しすぎたのか一発顔面直撃肌を刺すような痛み在眉が細くなる

「やった！わたしたちのかちだね、るむちゃん！」

「うん・・・やった」

ハイタッチする双子を見守りながらこんな日常を永遠と守っていきたいとそう心に決意した

「・・・？」

結局、日が暮れるまで雪合戦や雪だるま作りを楽しみみなさんの料理をごちそうになり自分の部屋に入ると机に色が少し違う二つの巨大なペンのような物があった

「なにこれ？」

近くにあった手紙を読んでみる予想通り空だった内容は仕事が予想

以上にあり終わるのが明日か明後日になるかもしれないので先にリンボックスに行つてのこと、この手紙を破ればリンボックスの近くまで空間が開くということでのペンみたいな杖はロムちゃんラムちゃんへのプレゼントらしい触ってみると分かったがこれは最上位の魔法発動体だ俺は持ってないがこれを使えば今使える魔法の半分は無詠唱で出せるあいつのことだからラムちゃんロムちゃんが魔法の才能があることを見抜いたんだろう

「あいつらしいな」

ホント手が速いというか抜け目ない奴だな今朝渡そうとしたものはこれのことだろう

「・・・寝るか」

もうみなさんやブランには明日には出発すると言ってあるラムちゃんやロムちゃんには泣きつかれ時は物凄く困った

「おにいちゃん・・・いる?」

昼の無邪気さと違いとても眠そうなラムちゃんが入ってきたその背後には同じく眠たそうなロムちゃんの姿もその手には枕?

「どうした?早く寝ないと身体に毒だぞ?」

時刻は9時俺にとっては早いので外で素振りでもしようと思った矢先だった

「おにいちゃん・・・あしたいつちゃうんでしょ?」

「まあ・・・そうだなやることあるし」

暇があればまた来たいと思っているから一緒のお別れじゃない

「そうだ、空がお前らにプレゼントだそうだ」

危うく忘れるところだった空自作（多分）の色違いのペンを見せる

「わあ・・・きれい」

「そらおねえちゃんは・・・？」

「ああ・・・急用でこっちに顔出すのは当分先になるみたいだ」

輝いていた二人の顔が曇る四大陸巡ったら会いに行けと言っておかないとな

「ほら、暗い顔するなあいつもお前達のこと好きだからこれ作ってくれたんだと思う」

そう言つて二人の頭を撫でてやるいまごろひいひい言いながら仕事に没頭する空を応援してやる

「・・・うん！わたしもそらおねえちゃんのこと好き！」

「わたしも・・・好き」

それはよかったただ・・・空の本性を理解しないで立派になってほしいな・・・悪影響にならず主にあいつのDSなど所とか

「おにいちゃんもすき！」

「うん・・・やさしくてあたたかい」

二人のタツクルを受け止め思わず頬が緩むなんかオマケみたいで不  
服だけどやっぱり嬉しいものは嬉しいな

「おれもお前らの事好きだぞ」

そついい再度、頭を撫でる栗色の髪から真新しいシャンプーの匂い  
を鼻を刺激する

「えへへ・・・」

「」

明日はリーンボックスへチカやベールは元気かな？





## 雪の国の日常（後書き）

自分もしかして日常苦手かもと思った今日  
明日も更新出来るといいな・・・

新たな出会いとまさか再会（前書き）

いきなり設定新たな入ったぜふと紅夜のこと考えていたら意外にいけるんじゃない？と思った

## 新たな出会いとまさか再会

「・・・・・・・・」

俺は空の言うとおりの手紙を破り開いた空間の中に入って行った手紙にはリーンボックスの近くと書いてあったので空中でも放り投げだされるかと思えば視線を埋め尽くしたのは白だった

「・・・首・・・が・・・」

それはとても硬く布が詰まっていた見ると自分の家のベットだった頭から突っ込みゴキツと嫌な音が首からした

「いたたた・・・」

痛む首を抑えつつ窓を開けるそこに広がった光景は住み慣れた雄大なる緑の大地『リーンボックス』が映った。前にも一度来たがあの時は家の掃除で大変だったのでゆっくり街は回ってないような気がする

「・・・・・・・・」

今はこの穏やかな空気を独り占め風から流れる自然の匂いが心を穏やかにしてただその風景を見つめていた

「――誰かあのスリを捕まえて!!!!」

「……はぁ……」

遠方から聞こえる声に反応しそちらを向くそこには女性のバッグらしきものを懐に持ち逃走している男の姿があった。重い腰を上げ窓に手を当て身を乗り出す自分の性格上こんなこと放ってはいけないそれに……

「雰囲気ぶち壊してくれた咎めは受けてもらうから……な！」

その言葉と同時に窓から落ちるそのさいに近くの鉄棒に捕まり遠心力を込め一気に自分の身体を持ち上げ近所の屋根に着地そのまま腕を後ろに疾走する！

「よつと……！」

声がる方向に向かい屋根から屋根へ駆け巡る慣れ親しむこの町の地理は既に学習済みだ犯人らしき影を探し周囲に目を光らせる

「……いった！」

更に力を込め跳躍、犯人は町はずれの森や逃げているのが見えた恐らくそこで金を抜き取り悠々と街を離れる気であろうが俺が帰ってきていたのが運の尽きだな！

「ゲへへへへ・・・これだけあれば助かるぜ」

男は木の陰に隠れ奪ったバッグから財布を取り出し入っていた金を計算し予想以上の収穫に下品な笑い声を放つその男は女性の財布の金をあらかじめ用意していた袋に移そうと・・・

パンっ！！

「ひっ!？」

突如発砲その弾丸は自分の足下に地面に風穴を開けその威力を物語っていた

「わざと外した次は当てる」

静かな威圧感を感じさせながら木で覆われた影から姿を現すのは凜然とした表情でこちらに銃口を向ける零崎 紅夜の姿だった

「な、なんのようかなおにいちゃん? そんな危ないもの持って・・・?」

ごまかそうと喋っているが動揺しているのが丸見えで更に紅夜は己の銃、緋壊螺の引き金に力を込める

「お前が持っているバッグは他人の盗んだものだ、更に言えばこんな道外れの森に一般人が女性のバッグ漁っているなんて異常ではない」

「・・・・・」

紅夜の推理に男は押し黙りバッグから手を離れた。その様子を見ながら警戒心を維持しながら近付いたその時・・!

「捕まっつてたまるかよ!」

その手から何かが投げられたそれは一瞬にして小さい太陽のように

輝きそれを光を見た紅夜の目は瞬時に狂った

「ははっはは！バカめ！！」

男が投げたのはラステーション産の閃光手榴弾その目くらましに思わず視力を奪われる。男は財布をだけを取り出しすぐにその場から離れようとするが・・・

「風華・絶刀」

そう呟かれた直後空気を切り裂く音と共に男の前の木が横半分にズレ落ちた（……………）

「……………へっ？」

「外した。やっぱり目潰され状態で動くものを当てるのは難しいな」

そこには切り落とした木の軌跡をなぞるように銃を横一閃に振った状態で止まっている紅夜だった……………目を閉じた（……………）状態で

「選べ、燃えるか、凍るか、斬られるか、埋まるか」

緋壊螺の属性変換は火・氷・風・土とありそれぞれの特徴がある火ならば燃烧、氷ならば氷結、風ならば切断、土ならば大地操作だったりバリエーションがある勿論これらの属性付きである魔弾も精製可能だ

「その……………その漆黒のコート……………まさか……………黒閃！」

「ああ、そう世間では呼ばれている。俺がいたことを呪うんだな」

気配がする方に近付き銃で一殴り気絶する程度の力加減だったので  
気を失いそのまま地面に倒れる男

「・・・閃光手榴弾とか油断した」

強烈な光に思わず怯んだが空の特訓のせいでなんとか反応出来た。  
袖で目を掻きながらようやく目を開けたまだおぼろげだが自分の  
手ぐらいい見える

「治安組織に・・・」

連絡とまで言いかけたが大切なことを思い出したここ（リーンボックス）に携帯通じるところないし！まだ中世時代のこの国に電話はあるが携帯なんてものがあるわけない！自分も持ってなかったけど緊急用として空に渡された携帯はあるが通じそうない

「・・・はああ」

深淵の如きため息をつきとりあえず奪われたバックだけでも女性のところまで持つていこうと男の握った財布を取りバックに戻しこの場を離れようとしたとき・・・

「ジャステイスキツクー！！！！」

蒼い流星が紅夜目掛け落ちてきた！

「つーー！！」

すぐに右を固め防御姿勢に入り衝撃に耐えるがあまりの威力に吹き





撃にしゃがみ

「聞けやあああ!!!!!!」

身体を回転させ腹部に肘を叩き込むそのまま宙を舞う日本一と言った少女、最初は痛い子かと思ったがこいつ・・・できる!日本一はそのまま飛び後ろの木を蹴り空中へ飛ぶ!

「Vエクストリーム!!!!!!」

「緋天・交差灼痕!!!!!!」

「・・・ここね」

爆発音と粉塵が舞う喧嘩というより行きすぎて戦争でもあったかと疑いたくなるような惨状が目映る。あたりを見渡すと連絡で聞いた謎のぺったんこ少女とハンターとなら生きる伝説と言っても過言

ではない凄腕のハンター零崎 紅夜が争っていた

「氷月・雨雲!!!!」

「一文字スラッシュ!!!!」

霰のように降り注ぐ氷の礫を一閃で吹き飛ばす。近くには女性のバツグを盗んであろう犯人が匍匐前進をして逃げようとしている勿論逃がすわけにもいかないので蜂型のオプシオンを召喚させ縛らせる

「あなたやるじゃない!!」

「おまえこそ・・・な!」

双銃を持つ紅夜は銃口から紅い刃を生み出しぺったんこ少女もペンギンを銃にした武器で光刃をつくり真つ向からぶつかる

「・・・言っても聞かないでしょうね」

いまだに辺りの環境を滅茶苦茶にしながら争う二人にため息をつきながら再び二つのオプシオンを召喚しそれを変形させ双銃に構える  
目標は零崎 紅夜とぺったんこいうな!!」

「ん・・・ケ、ケイブ先輩!?なんでここ・・・!」

ぺったんこ少女が止まり異変を感じた零崎 紅夜がこちらを向くが少し遅かったもう引き金は引いている。込められたエネルギーが爆発するように唸りそれは巨大な閃光を生み出し無慈悲に二人を飲み込んだ

「・・・これは喧嘩両成敗っていうことになるのかしら」

かつての後輩には少しやりすぎたかもしれないがお灸にはなったであらうと彼女リンボックス治安組織の一員である『ケイブ』は辺りの被害をどう処理しようかと頭を悩ませた

## 新たな出会いとまさか再会（後書き）

はい！ようやくだせた日本一！あの正義感と熱血好きです！そしてケイブ先輩も登場まあ・・・紅夜はしばらくリーンプックスで働いていて他の大陸に飛んだと自分でも書いていたと思うので・・・紅夜の正義感から自治組織でも働いていたとかそんないきなり設定を思いついたんですね・・・行き当たりバッタリです。次回もお楽しみに！

風華・絶刀：銃先に風の刃を生成しそれを発射しながら振るう技

緋天・交差灼痕：X字の炎跡が生まれる斬撃これも銃技

氷月・雨雲：周囲に魔法陣を展開させ氷の礫を霰のように撃つ技、威力は少ないが連射力は強い

とりあえず、しめんなさい(前書き)

・・・テストいくつか帰ってきたけど回答が一個ずつズレていたところがあった・・・our

とりあえず、ごめんなさい

リンボックス治安組織、それは俺が昔働いていたところだった記憶を封印しゲームギョウ界に来た時にベールに助けられたが他国のスパイではないかと疑われていた時期があつた。勿論この世界の名前ですら知らない俺はただ呆然と周囲の波に流されていたが俺の心は誰かの助けになりたいという気持ちがだけが残っておりそれをベールに相談したところこの治安維持組織に監視も含めて配属してもらつた・・・毎日、モンスターの討伐だつたり犯罪者の取り締まり観光客の案内だつたりはては、年寄りの補助に行方不明の子犬探しだつたり様々なことをした

・・・つで、そのとき俺の監視役だつたのが特命課に所属していたケイブ先輩だつた。仕方がない自分の置かれていた状況もなんとなく理解していた

「聞いている・・・？」

彼女はまじめでクールな性格をしていても何も分からなかつた俺に親切に色々なことを教えてくれたのを覚えているいつも遠くを見つめ人ゴミの中を駆け巡る彼女に俺は尊敬していた時期もあつた・・・だけと俺は他国の人助けをする事を決めリンボックスを飛び出したそのころにはそれなりの信頼も得て記憶障害なのも理解してもらつた為無事に許可をもらつことができたそのとき治安の仕事も辞めてしまった

ポカッ



「あいた」

鉄型の杖で頭を叩かれた

「話の途中に別の事を考えない」

「・・・はい」

思考は現実に戻った誰も怪我をしてないとはいえ環境破壊をした日本一と俺はケイブ先輩のありがたいお説教を受けていた俺が気絶させた男は牢屋行きらしい反省しろってね

「これから気を付けることに・・・分かった？」

「は〜い」

「はい」

俺とは違い間の抜けた声を出す日本一、一応誤解があったのことに  
ついて解消され謝られた。ちゃんと反省しているし強者と戦えて逆  
に為になったと思う

「それじゃ帰っていいわよ」

ケイブ先輩の声と共に硬い床の下で正座状態を解除し立ちあがろう  
とすると

「コウヤは居残り」

「えっ・・・」

ケイブ先輩が横目にズラしたのでその方向をみるとそこには天井に届きそうにまで詰まれた書類の数々

「・・・手伝え？」

「あなたの性でもある」

分かりましたよ畜生・・・日本一はもういないダッシュしていたからな・・・仕方がないか・・・

「この机を使つて」

「・・・まだ残っていたんですね」

ここを辞めてしまつて丁度半年ぐらい自分が書類の片付け等に使用していた机はいまだ変わらずその場所にあつたことに思わず呟いてしまった

「・・・」

ケイブ先輩は何も言わず黙々と積み重ねられた書類を消化し始めた俺もすぐに作業にとりかかる

カリカリカリ

とペンを動かす音があたりを支配する横に視線を泳がしケイブ先輩を見るが表情は変わらずただ猫や犬が描かれた可愛いデザインのペ  
ンが走る

「・・・あなたも有名になったものね」

「えっ・・・？」

ピタツとその手が止まりこちらに向くケイブ先輩の顔

「聞いているわよ『黒閃』と呼ばれて大陸を渡り歩いて強大なモン  
スターをたった一人で討伐していく凄腕のハンター・・・っとな」

「恐縮です・・・ケイブ先輩はどうですか？」

確か特命課は部長含めて三人しかいなかったはずだこの書類だって  
本来ながらその三人でやるはずの物だと思っが

「大変だったわ。けどこの頃モンスターの激減と異端者も数を減つ  
て今日のようなことが珍しいぐらいに落ちついたわ・・・これも女  
神様のおかげね」

「ははは、それはよかったです」

ホント頑張ったな・・・

「そっだチカはどうですか？元気にしていますか？」

ケイブ先輩とチカは友好関係がある性格には上司と部下の関係であ  
るが同世代である二人は話が合うらしく仲がいい

「そうねお兄様分が足りないと思痴っていたわ」

「ははは、そう・・・ですか」

それは気の毒そうなので近く会おうと思うけどその前にベールに協力をお願いしないといけない・・・

「いい顔になったわね」

明日の予定を考えながら顎に手を置いてしているとケイブ先輩から声がかかる

「あなたと最初に会ったとき、あなたは無我夢中になにかから逃げるように怯えるように仕事をこなしていた・・・今の貴方は自分のすべきことを見つけた・・・そんな表情をしているわ」

なにかから逃げていたそれは結局分からなかったけどネプテューヌ達と出会って自分のやりたいことを見つけてそれから自分の望む未来の為に今を精一杯頑張るこれはきつと俺と会った全ての人ののおかげ  
「一人で見る夢は夢でしかないかもけど、誰かと見た夢は現実だと  
思うから、きつと・・・俺はあいつらのおかげで・・・一つ夢を叶えることができました・・・次は俺の番なんなんです。俺があいつらの信念を守る番なんです」

そのために今のこの力、冥獄神を手中に収めないといけない、やらないといけない

「いい仲間を得たのね」

「・・・はい！」

そして俺はあなたと会えたことも良かったです

「・・・すっかり遅くなったな」

書類をある程度片付き要約解放された俺は夕焼けの空を見ながらほ

つとため息を付く家にはなにもないから今日は外食ですませようかと足を進めると風と遊ぶ紅いマフラーが目に入った

「……遅い！」

俺の視線の前には夕陽をバックに遅しく仁王立ちする日本一の姿だった

「あれ？お前帰ったんじゃ・・・？」

「あんたにもう一度謝りたかった・・・すまない！」

はぁ、と声を零してしまうそのことはもういいのに意外に律義な奴だと思いながら俺は彼女に近づく

「それはもういいよ・・・それにしても日本一って言ったか強いな」  
人間クラスなら絶対にトップクラスだそれにまだ伸びる成長というものには自分に満足しないことどっかの本で読んだ記憶がある

「私はゲームギョウ界のヒーローだからねあれくらい当然よ！そういう貴方も強いわね・・・貴方名前は？」

「零崎 紅夜だよろしくな」

「よろしくねコウヤ。それじゃまたどこかで私の助けを呼んでいる者がいるから！」

と言ひ残し疾風の如く去つていく日本・・・なんだか熱い奴だつ  
たな





「ただいま」

夕陽は既に沈み星空と満月が見えた時刻に俺は帰って来た誰もいない実家のドアを開け入室する明日は協会に行こうかと思いつながらコートを掛けたとき寝室から物音がした

「……はあ」

念のために緋壊螺を一丁持ちゆっくりと足音に注意しながらゆっくり寝室に近付きそして……

バンっ！

「ふえ？」

寝室にはメイド服らしき服が散乱しているのとその中央に雪のような健康的な肌にとらりとモデルのように無駄のない美脚を曝け出し月光と戯れる黄金の髪にはっちりと開いたダイヤモンドのような銀煌の瞳そして形ずれないバランスのとれた乳房

それは目を疑いたくなるような幻想的な光景だった

「はわわわわ・・・見るな——！！！！！！！！！！」

その人物は明らかに空だったがなるほどあれが空の女性バージョンだったのかとおもいながら俺の視界は赤色に染まった

とりあえず、しめんなさい(後書き)

次回はチカとベールをだしたいな・・・

助けて・・・(前書き)

恐らく三日ぶりの更新、どうぞー！

助けて・・・

「なにか弁解の言葉は？言い残す言葉は？死に際の言葉は？隅っこでがたがたにゃーん怯える用意はできた？」

起きた瞬間、最初に聞いたのはあいさつとは別次元の恐ろしい殺人予告だった

「えっと・・・ここは俺の部屋です」

意識が覚醒しない昨日なにかとてつもないものを見てしまった気がするがとりあえず言えた言葉はそれぐらいだった

「そっかそっか

「――ならば死ね」

ギヤ――

「……っで、お前なんて恰好していたんだ？」

アニメにありそうな全身包帯にされながらの朝食、やっと思い出せた。たしかこいつメイド服を脱いで元の服装に戻ろうとしていたところだった

「……拷問の車輪に縛って撲殺されたい？」

はいはい、怖くなった空から目線を外すよっぽど触れてほしくないみたいだ。でも俺にはまだ手がある

「そうか、なら空はコスプレ癖があったと認識していいんだな」

「!!!!・・・違うよ!あれは・・・!」

口ではあわあわ手は虚空に何か描いているが理解不能だそんな慌てている空をみると結構面白い

「おねえちゃん・・・に、やられたんだ」

消えそうな声で、もじもじしながら呟かれる。・・・おねえちゃん?

「お前姉いたのか?」

「義理だけどね」

はあ、それはまた乙な話だなコスプレ好きの姉かでも空の関係者ってみんな強そうだな

「全世界? 4の実力者、せいぎ星輝 せいな聖奈僕とは対等である創造神だよ」

確か空は? 3だったよな。それじゃお前の方が強いのかそして性も違うんだな

「おねえちゃん上下のなんて興味なかったから神だと血縁とかあんまりないんだ神は世界によって生み出されるから大雑把に言えばみんな兄妹でもあるね。神の名前なんて人間が勝手に付けるか自分で

作るもんだって聞いたよ僕の名前だって自分で決めまし」

世界が親で子は神、それじゃネプテュー又達も言いかえれば姉妹になるのか……意外に合うかも

「?待てよお前義理って言っていたよなそれじゃ矛盾してないか？」

俺の質問に空はしまったとした表情をみせる世界が神の親なら空は勿論世界から生み出されことになるけど空は義理と言ったその話だとまるで空は世界が親じゃないみたいない方に聞こえる

「……あ……えつと……」

ないかごまかしを考えているだろうが徐々に空の顔が曇っていく……聞いてほしくないことなのか。話を逸らす為の話題は……

「お前?3なんだろう?」

「えつ?あ、うん」

下向いていた顔が起き上がるとよかったこれはいいみたいだ

「残りの?2と?1はどういう奴なんだ?」

「……強いよ?2は状況によっては僕、瞬殺されるし?1なんて片手だけで負けるもん」

「……はっ?空が瞬殺される?片手だけで負ける?はあ?」

「なにそれ怖い」



「ははは、僕とおねえちゃんとは次元が違うよ。あの人の前では僕はモブキャラがいいところだよ」

「バグだ」

心からそう思ったことは間違いないはずだ

「?2はクロウ・ラーズディングおにいちゃんて次元神だよ?1は全ての頂点にして始りと終わりの神、始終神と呼ばれているアルゼント・ユグドラシル僕のおとうさんにあたる神だよ」

話によると?2のクロウ・ラーズディングという次元神はその名の通り次元を司ることができ空間や時間を操ることができるそれはまさに0秒の世界、空でさえ時間を破壊しないと動くことは出来ないらしくさらに空間操作からの全周囲攻撃等、反則的攻撃がメインでありもし奇襲されたら間違いないく負けらしい・・・時間がストップされればそりゃ何もできないなフルボッコだ。・・・っで?1はアルゼント・ユグドラシルという始終神はバグ意外何でもない全ての力は彼の前では意味をなさない。例えどんな力を使っても攻撃でも始りに戻らされて全ての存在は強制的に終わりにでもさせられる。言わばそれは因果律を操る力らしく打ち破ることは無理とのことさらに腕っ節もありえなく強く

曰く指一本で星を割ったり

曰く身体能力だけでブラックホールをぶち壊したり

曰く拳ひとつで世界に罅を作ったり

「僕を含めた全ての世界の全勢力がおとうさんに立ち向かっても絶対に勝てない。それはもう決まっていること」

「はぁ・・・世界は広いな」

あと頭痛くなってきた。けど空は家族のことを自慢出来て嬉しいのかいつもの空に戻っていた。

あと世界神は役割があり始終神は神全ての象徴者、破壊神は執行役、次元神は監視者、創造神はまんま創造者と聞いて分かったが破壊神と次元神は忙しそうに見えるが創造神は世界を造るだけなので簡単らしく暇を持て余してところ人間の流行っていたゲームやアニメにどっぷりハマってしまい今や仕事仲間に原初のニート神と呼ばれるまでなつたそうだ・・・勿論ろくつた仕事せず遊ぶだけで空とその兄と親は頭を抱えているらしい

「神にもいろいろあるんだな」

「そうだよ神なんて所詮人間より上位の存在であるだけ失敗はするし罪を犯す時だってあるそんな存在なんだよ」

朝食を済ませ協会に向かう途中も空の話に耳を貸す聞いてみると面白いと思うところが幾つもある・・・まあ半分愚痴に近いが

「これは人間でも言えることなんだけど・・・恋愛関係はもうめんどくさくてね」

「恋愛？」

たまにきく夫婦喧嘩とかそんなことが頭に浮かんだが空は俺の思考を読んだのか深くため息をついた

「世界によつては一夫多妻とか一妻多夫とか認められているところがあるんだけどそんな世界はたまに喧嘩が起るんだよね・・・」

「うわぁ・・・」

「正直人間にみたいになにかを放り投げ合いとか甘いもんだよ。人間より上位である神はもうなくそー！みたいに暴れまくるから世界が滅茶苦茶になったりして最終的には僕たちが動かないといけない危機になったりね・・・はぁ」

底の見えない再度ため息を付く空に顔が中年のやつれたサラリーマンに見えたのは秘密だ

「だからね紅夜別に神になったからって全てが変わることじゃないんだ自分のあるべきままに、それが一番」

「そうだな」

まっ、人ではできないことをやらないといけない責任ができるという違いだけということらしい

「紅夜もそんな問題を起こさないでね」

「俺の場合は相手がいないから論外だろ」

「・・・ソウデスネ」

片言で返されたいやおれ恋人とかいないし関係ないだろう。そんなことを思いながら俺達は協会に足を運んだ



まだ朝の日差しが差す中で大きな鐘が鳴らされ同時に鳥たちが一斉に旅立つその光景にしばし見惚れ俺たちの前に立ち聳える協会を見つめる

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

ただここから始ったんだと思えば思わず頬が緩んでしまう

「さて・・・」

扉を開ける入ってきたのは宣教師の言葉に耳を傾ける信仰者や忙しそうに清掃者が回っているいつもの光景だと思いつつながら俺はベールの部屋に向かうあいつのことだからゲームをやっていたり暇しているだろうから今日はひっぱり出す気だ

「・・・」

俺の後ろを付いてくる空は興味深そうにあたりをきよるきよるする協会に入ったことがないのか？今のところことラスティション以外の協会にお邪魔したんだが

「・・・」

まあ、そんなことはどうでもいいとしてやっとベールの私室の前に立つ前回の過ち（BLゲーム一緒にやらされた）を反省している俺はまず扉に聞き耳を立てる・・・うん、大丈夫だ可憐な女性が戦うような声が聞こえるから格ゲーをしているだろうただ・・・

「・・・あつ、そこは・・・だめです。お姉さま

「・・・ふふつ、チ力は可愛いですわね・・・

「・・・きゃ、あああ・・・！」

「・・・なあ空、俺はどうすればいい」

「・・・笑えばいいと思うよ」

笑っても解決しねえよ。ゲームしているんだよな？でもえっと、頭の中で混乱が立つ確かにチ力はそんな空気はあったがまさかベールが攻めにはいるなんて・・・！

「同姓か・・・ははは」

なぜか遙か先を見つめる空、乾いた声にその目は何かを語っていた・・・まさか

「お前はこんな経験があるのか？」

扉を指さし半分冗談半分本気で質問すると空の髪が稲妻が走ったように逆立つ

「長生きしていると色々あるんだよ・・・」

確かこいつ男女の概念がないから男女気が向けば身体を変えられるらしい顔は生まれつきらしくデフォは男らしいが絶対に合っていないコートを着ているから分からないけど女性にしか見えないもんお前どっからみても女顔だし

「頑張つて生きろ」

「大丈夫、大体のことならティム達がガードしてくれるから」

ふむ、空の従者ならそれなりの実力者はあるだろうし保留しておくか

「だからこそアリアとティムに告白されたときはびっくりしたな〜」

「へえ・・・えっ?」

なんかとんでもない爆発発言が聞こえたぞもう一度聞こうとするとドアが強引に開かれた・・・あ、空ドアと一緒に壁になった

「誰ですの!?!私とお姉さまの愛の巣を前にこそこそしゃべ・・・お兄様!?!」

「・・・よっ、よう。ベールはいるよな?」



とりあえず手を上げて挨拶、はみ出た空の手が痙攣している恐ろし  
や我が妹分チカよ

「勿論居ますわ！ささ、どうぞお兄様！！」

と言いながら腕に巻きつくように抱きしめられる勿論そんな絡め方  
されたら胸が・・・しかもこいつベールの本当の姉妹かと思うぐら  
い胸がある腕が埋まるくらいにはある・・・顔に血が昇っていくぞ。  
これ

バタンっ！！

「あいたた・・・あれ今日のお話僕の出番はここまで？」

「・・・なあ」

俺はそのままベールの部屋に連行（誤字あらず）され新しく発売さ

れたであろうゲームをやらされているタイトルはガ ダムエクスト  
リームバーサスだ・・・因みに俺の使用機体はクロスボーンX1（  
改）だ格闘戦向きで扱いやすい機体だ

「なにかしらコウヤ」

「なんででしょうかお兄様」

となりにはもう一つのコントローラーを持つベールいつもの温厚な  
顔とは別格でその瞳には炎が宿っているこれからアーケードのハイ  
レベルと一緒にやることになった・・・因みベールの機体は最強と  
名高いクロスボーンX1フルクロスだ少々癖があるが使いこなせれ  
ばもはやチートの的な強さになる。チカはベールと反対方向つまりは  
俺の隣で観戦

「いや・・・少し暑いです」

退いてほしいなぜなら今の状況、女神の中で一番発育のいいである  
う身体がこれでもかと言わん限り身体を寄せて来ているふありとい  
い香りが鼻腔を刺激する。

さらに隣では抱き枕を抱きつくように腕を絡めてくる意識していな  
いのかその谷間には俺の腕を飲み込んでおり全く落ちつけない

なにが言いたいかというところこいつらスタイルがグラビアアイ  
ドル級にいいのに服の露出が多すぎるんだよ！とくに胸の部分！！！！

「ですってチカあなたがいると集中できないそうですわよ？」

「お姉さまこそ無駄にくつつきすぎじゃありませんこと?」

こんな空気は初めてではないチカとベールと俺が一緒の場合のみこんなことになる

「・・・私達仲がよろしいでうよね?」

「ええ、私はベールお姉さまを本当の姉のように慕っておりますわー！けどこういうことは別だと古からのお約束ですよね?」

俺の立ち位置はまさにいま両軍の兵が銃の引き金に力を込めいままかとした緊迫状況の中、戦場の真ん中で孤立している一般人。うん自殺志願者だな

「えっ、ほら、始ったぞ?」

なんとか二人の笑顔だけど笑顔でない状態を壊す為に必死にゲームの場面に視線を戻させる。そのあと結構プレイしていくやはりベールは上手い相手の動きを先読みして相手がガードする直前にキャンセルして後ろから叩き斬って相手のブーストがなく地面に着地し硬直時間を狙つてのをコンボ技を決めていく

「クリア!やりましたわねコウヤ私たちの相性は抜群ですわね!」

最後のボスを倒した直後チカと同じように抱きついてくるベールそのたわわに実った胸がマシユマ口の感触を感じさせながら変形していく

「ぐぐぐぐ・・・お兄様!」

なぜか『私たち』のところから悔しそうに唸るチ力は更に力を込めて来る視線を下ろせば白色の布が脆見えこれはすごい色々

「えつと・・・なんだ？」

「これから買い物でもいかかでもよろしいですか？ワタクシ欲しい服があるんです！」

「そう、ならいいよ」

「二人つきりですよ？」

「えつと・・・」

顔から滝水のように汗が流れるそれはチ力とは逆の方向からそれは恐ろしいモノが爪を立てて俺の腕に徐々に入りこんでいくからだ

「コウヤ？私のところに来たということは仕事ですわよね？話を聞きますわ」

仕事嫌い・・・と言うわけでもないが少なくともそういうことは積極的ではないベールが今日は異常な鋭さでこちらの思考を読んでくる

「モンスター退治なんだけど・・・ちょっとベールの手を借りたくな〜って」

「いいですわよ。まだ昼前ですし、そうですね今日はモンスター討伐とついでに私とコウヤだけで食事に行きませんか？」

勝手に話を進められる今度は元の腕の方に力が込められぐいつと身体を引つ張られる

「お姉さま先客はワタクシですわよ！」

「あらチカ、モンスターは大陸に害を及ぼす存在でコウヤが私のところを訪れて頼みこんでくるとうことはそれなりに脅威であるモンスターだと予想ができますわ。それがもし街に下りてきたら大変です。ですのでこれは緊急事態でもあるのですのよ？」

今度はぐいつとまたベールの方向に引つ張られるお前ら俺は一つだからそんなに力を込めないでくれるか・・・千切れる！

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

お互い一步も譲らない静かでそして激しくもある冷戦の真ん中になんとかしてくれ〜と心の中で嘆く、ふと俺の頭に桃源郷という文字が浮かんだがすぐに消えてしまった。ちなみにこの状況は結局チカが下りてベールの勝利となったが埋め合わせはするという約束をかわしてしまった紅夜もいたとか・・・



助けて……（後書き）

空「今回ぼくの扱いひどかった」

作者「あははは、ごめん笑ってごめんなさいだからゼロ・レクイエムの用意しないで」

空「それにしても今回遅かったねなにしていたの？」

作者「いやね……自分修羅場上手く書けなくてね手持ちのラノベだと修羅場要素があんまりなかったから新しい適当に買って学習したんだよ」

空「そうだねデート・ア・ライブはまあまああるけどいつ天とかISとかひだアリとか戦闘中心（ISは論外）だからね。所で何を買ったの？」

作者「えっと、つきツキ！としゅらばら！というラノベだよ」

空「うん後者はまんまだね」

作者「為にはなった！つとということで次回もお楽しみ！」

空「次回は戦闘いくかな？あつそうそう作者」

作者「うん？」

空「ゼロ・レクイエム」



作者「えっ？ぎゃあああああつあああああ！？！？！？！？！？！  
」

空「意外に根に持つちゃう空ちゃんでした、てへ」

勝負！魔天蟲『ウロピアス』（前書き）

更新遅れてスイマセン！

## 勝負！魔天蟲『ウロピアス』

天を仰げば蒼い空、大地を満たすのは緑の自然、心地よい日光は身体  
の疲れを癒してくれる

「うんうん、自然はいいよね」

「……おまえその額は……」

沸き上がる笑点を抑える今俺のとなりいる空はその額に×の絆創膏  
をつけ少し涙目だった。

なんでこうなったか知っている身でもこれは少し面白い

「その怪我どうしたのですか？」

モンスター退治という名目で外に出させたこの地の守護女神ベール  
詳細を伝えると思いつきりため息つかれたあとに空が動向を共にす  
ると「二人つきりじゃないのですね」とか言って少し凹んでいた

「……世界補正に負けたんだよ。前は勝ったのに……」

前と言うのは恐らくOHANASI（一話参照）の時だろう女顔だ  
けど男なので大人泣きかとりあえず頭をぼんぼん叩いてやると「僕  
を癒して〜」と抱きついてきた顔だけ無駄に可愛いこいつが上目遣  
いをしていき少し保護欲を掻られる

「……ソラサン？」

あっ、久しぶりの黒ベールだ

「あいた！いたいたいたい！耳は引つ張るもんじゃないよー  
！！」

俺に抱きついてきた空はベールの耳を掴みにより一気に引き剥がされる

「耳がー！耳がああー！！」

よっぽど力を込められていたらしくム 力大佐のように叫ぶ空、千切れては・・・ないよな

「さ、コウヤ行きましょう」

それを罪悪感なし更に置いてきぼりしようとするベール、いきなり密着率がMAXなり全身の血流が一気に頭に昇るコートの上からでも感じられる彼女の体温、ほんのりと甘い香り、押し付けられ形状を変化させる大きな胸その全てに動揺してしまう

「・・・やっぱり紅夜も男の子だね」

空が何か言っているが聞こえない。聞いてしまったら横の女神様が突っ込んできて収拾ができなくなる

「じじだよ」

封印されている場所に到着、なにもない野道の途中で空は歩み止めた

「洞窟ではありませんの？」

「RPGじゃないからな。いかにも！とした場所にあつたら一般人が間違つて封印解いたら大変だろ？」

俺の捕捉に理解したように頷くべししかしその顔は少し不満げ・  
・ゲームとリアルを一緒に考えていたなこいつ

「今回は魔天蟲『ウロビィアス』っていうんだけど・・・ガンバレ  
！」

それだけ？それだけなのか？いい顔にして親指立てる空に思わず転びそうになった。よく見ると空、若干顔色がよくない

「今回は見物もしないから君たちなら絶対に勝てるよ。君たちのコ  
ンビはある意味一番強いかもしれないしね僕なんていらぬいんよね  
？勿論冥獄神化も許可するよ。ということでは応援しているから〜  
！！！！」

なにかから逃げるようにその場から離れる空に思わずベールと共に  
頭を傾げる。その様子はまるで苦手な物から逃げるような様子だった

「・・・まさか、ですわよね」

「なにか分かったのか？」

今回はどんなモンスターなのか全く情報がないとありあえず強いぐら  
いしか分からない。できるだけ余裕を持って倒したいので俺はベ  
ールに聞くと・・・

「空さんが苦手なものありましたわよね？」

「……………」

全身の血液が一斉に冷める。

でも自分の苦手なモノを自分の手で作る奴……いやあんがい抜けているところもあるから作りそうだ。克服しているかもしれないかもしれないがああ反応はその可能性が近い

……いまのところ判明している空の弱点それは『G』、それをまんなまモンスターはないと思うがある意味前回と比べて一番苦闘するかもしれない

女神化したベールと共に目の前に出現した鎖で縛られた扉、世界を手中に収める結界魔法『テラフォーミング・アトラクション』が発動され世界は一変し先ほどまで聞こえていた小鳥の囀りや風の音さえも聞こえない静寂に包まれる

「……予想外れているといいな」

「ええ、そうですね」

そうお互い呟いた直後、鎖が千切り飛んだ。俺達はすぐに反応しその場を離れる、俺たちがいたところには触手らしきものが地面を突き刺していた

「俺達を仕留める気ならもっと速く強くだな」

「高速戦闘が得意な私としては止まっているでしたわ」

背中の紅曜日と腰の緋壊螺を抜き空いた暗黒の続いている扉の向こう側に銃口を向ける

ズシツ、ズシツとこちらに近づくとモンスター、闇の中から紅い複眼が一斉に光り始めその異体の姿が現れた

羽のように伸びた四つの突起に薄汚れた茶色の甲羅、焼きただれたような全身の肌のようなもの奇襲してきた触手は四つの足となり宿主の元に戻っていく数えきれない紅い複眼は奇妙に光り恐怖の威厳が満ち溢れるそれは・・・とても気持ち悪い

「予想よりは酷くありませんすわね」

「これでカサカサ動いていたら最悪だけど・・・まあこれくらいならギリギリ大丈夫だ」

声にならない声を上げ魔天蟲『ウロビィアス』はその巨体では信じられないほどの跳躍しこちらを潰そうと落ちて来る。

それをかわした直後すぐに緋壊螺を火属性で撃つが全くダメージになっっていないウロビィナス前足である四つ腕は五本ずつの触手となりその先には鋭い鋸状の爪が光る。紅曜日で一斉に襲ってきた五本の爪を弾こうとするが一気に吹き飛ばされた

「・・・これは強いな」

爪が頬を掠り血が流れるそれを袖で拭きとり呟く心配そうな顔で近づくベールに「大丈夫と」返すと安心するようにため息をつく。見た目から想像もできないほどの跳躍力に硬い甲羅、合計20本の鋭い爪、速さはないがそれを補いだけのリーチとパワーがある中々の強敵だ

「冥獄神化の使用限界時間は三分・・・いける？」

「私もいますわそれを忘れないでもらいです」

横にいるベールの言葉に思わず苦笑してしまっそうだな今は二人だ

「それじゃ、俺たちのコンビネーション見せてやろうな」

ゲームギョウ界の負が結晶化し紅黒のプロセッサユニットを装備しその手には銃口を飲み込む形状をした双銃剣、バックプロセッサはノイズの翼を広げる。それは恐怖と絶望を呼ぶ破滅の翼

「ええ、それじゃ・・・」

ブラッディ・ハート  
冥獄神化完了。お互いの呼吸を合わせ同じ位置まで武器を上げその先にはウロビイナス

「「行きますか(わ)!!!」」

ウロビイナスの複眼が一斉に光りだし拡散した光線が向かってくる俺達はそれを受け流し、弾き、かわし距離を殺していくウロビイナスが地面に触手へと分けた足を突き刺すと螺旋を描いた角が地面を蜂の巣にしながら迫ってくるベールはまるで躍っているかのよう



地面からその身を貫こうとする爪をかわしていく。俺は翼を更に大きくさせ空中に飛び翼を分散させる

「ジエノサイド・レーゲン!!!」

分散させた翼は嵐のようにウロビィナスに降り注ぎもちろんその強固な甲羅により大したダメージになつたが土煙りがあがりウロビィナスはベールの姿を見失いその複眼で探すが土煙りが原因で前すら見えない。そういう風にさせる為に撃つたからな!

「レイニートナピュラ!!!」

突如、神速の突きがウロビィナスの目を襲う現れたのは黄緑の髪に西洋の鎧を感じさせるプロセツサユニットをその身に装着したベールの姿

「レッド・オブ・サンシャイン!!!」

視力を失いやみくもにあたりを攻撃しようとするとき紅く巨大な弾丸が撃たれ爆発を起こしウロビィナスは思わず後退する。その隙に俺達は肩を並べ突きの構えをする

「闇を一閃する。燐光の瞬き!!!」

ウロビィナスは残つた眼は光始め収束していくが既に俺達は地面を蹴り雷の如く駆ける!

「双牙烈光刃!!!」

風より音より光より速い一閃はウロビィナスの肉体を刹那に貫きそ

の生命は穿たれその身は汚濁な緑の鮮血を撒き散らし絶命した

「俺たちのコンビネーションは」

「どつでしたかしら？」

彼らの眩きは紅き刃の面影と雄大なる大地に溶けていった

「ふう、まさか人の恐怖を適当に具現化して適当に混ぜたらあんな  
モンスターが生まれるなんて予想外だったよ」

あんなGと蜘蛛が混ぜって適当に他のモンスターと混ぜ混ぜした結果あんなヘンテコ（けど強い）モンスターを生み出してしまったその創造主は一人寂しく木の枝に身を巻かしていた

「ううう、寒気がする。やっぱできないこと誰だって一つや二つはあるもんだな」

実は空あれからそれなりに頑張ったがやはりGを克服できていない。今でも見るとあたりを灰燼と化すか荒地に変えてしまいがその場所の存在を破壊したりしてしまう。Gも生態系のバランスに入っている。存在を破壊することが神としての立場上できない。そんなことを考えながら空は地面へと降りて結界魔法を解除する

「さて、っと。なにか言われる前に帰ろうかな」

いままでとはなにかお疲れっと物を送るのだが紅夜達の近くにはまだ

死体がある可能性があるので見たくないなので空は一足さきに帰ることにした……のだが

ガシッ！（肩を掴まれた）

「……にやははは」

さすが最も付き合いが長かったコンビ、自分の予想を超え居場所を掴まれた

「空、奇遇だなここにいるなんて」

まだ三分たっていないのか冥獄神化状態フラッディ・ハートの紅夜

「そうですね。私少し空さんにお話があるのですか……」

妖艶の笑みを浮かべその手に大型ランスを持つこの地の守護女神ハートであるベール

「えっと……許してにゃん」

ここは必殺萌え騙し！手を丸め可愛く声を上げる。一般人ならその仕草に萌え〜というが残念ながら彼らは一般人ではない

「「問答無用！……」」

その後、空の頭には桃のようなタンゴブが出来たの正に自業自得である

勝負！魔天蟲『ウロビィナス』（後書き）

はい三匹目あと一匹ラストはラストイションです。次回は・・・まだリーンプックスですが色々やりたいなあ〜と思っています。どうぞお楽しみに

・・・腰痛い（今日誤ってすべり階段の角に腰を強打してしまった  
（涙））

ジェノサイド・レーゲン：使用は冥獄神化時のみで翼を拡散させ落とす弾幕な技、多少は威力あるが残念ながらウロビィナスの甲羅には大したダメージにならなかった

とある破壊神の一日前篇（前書き）

寒いですね・・・また風邪引きそうです。思ったり長くなりそうですから前篇後篇に分けます

## とある破壊神の一日前篇

やあ！僕は夜天 空、破壊神であり前作のラスボスでありこの小説の副主人公でもある神様だよ！

はやくも三体目次でラストなんだよね。まあ、倒したところでなにかが変わるわけじゃないけど今日はゆっくり過ごすことにしたよ仕事は昨日ベールと紅夜が一緒に出かけた時に片付けれたから今日はゆっくり休日を楽しみことにしたよ

「ふう・・・」

一人外の風景を楽しみながら紅茶を一口、因みに僕は紅夜の家にいる。一応ぼくもゲームギョウ界のお金は持っているけどお金は有限なモノだからね無駄使いはしたくない。

紅夜はいない未来教祖になるチカと買い物に行ったとうことで今日めずらしく僕のとなりに紅夜はいない僕しかいない紅夜の部屋は必要最低限な物しかない。

興味で全ての部屋を探したんだけどエツチな本は見つからなかった。無念！

「やっぱり暇だな」

ふと実家に帰ろうかなと思ったが光の速さで却下する。お姉ちゃんに捕まったら今度こそ数力月は監禁されコスプレ地獄を味わうことになる



「なら・・・冥獄界に行こうかな」

実のところ言うと冥獄界は僕が何かしなくても勝手にモンスターが  
生み出される。

モンスターを生み出す種になるのは人の負の感情それはあの剣を通  
じて冥獄界に送られる。

つまり冥獄界という世界そのものがモンスター製造所なのだ

だが製造所したものは外に出さないといつか置く場所が無くなって  
しまう。その場合が無言わずゲームギョウ界にモンスターが送  
られる少しいかないことかもしれないけどそうしなければかなり危  
ない。

例で言えば風船、モンスター空気を入れそのまま増幅する風船には限界があり  
もし爆発した場合、今現在冥獄界にいる全てのモンスターがゲーム  
ギョウ界になだれ込む数で言えば億は余裕で超えるので・・・まあ、  
ゲームギョウ界が混沌になるの確定なので定期的に僕が冥獄界のモ  
ンスターを減らして冥獄界のバランスを守っている。まだいっぱい  
になるのは速いけどもし紅夜との修行と僕の仕事が重なればやる暇  
がないかもしれない

「結局これってお仕事なんだよね・・・」

忙しい忙しいけどこれはいつか紅夜が冥獄神として完成したら仕事  
内容は譲渡になるからそれまで根気強く頑張りましょうかね



紅い大地が永遠と広がる地面を見下ろせば肉が裂ける音や異体の咆哮が耳を刺激し魑魅魍魎の存在がお互いを殺し合うそんな大地にあまりにも不似合いな純白のコートを身に纏った空が降りてきた

「  
「  
ウウウ・・・！！！！」  
」

モンスターはその時、生まれて初めて白色を見た理性を無くしたらしく爛れる液体はまるで日に昇る太陽をみるような眼差しだったがすぐに目の色を変え飛び上がったその先には空の姿

「空虚刀流・爪紅」

その呟きと共に理性を無くしたモンスターは空へ襲いかかったが一

瞬にして切り裂かれその肉体は再び大地へと帰った、だがその原型は留めていなく他のモンスターも吊られるように次々と空に襲いかかる

「さあ・・・Zeromissionの始まり」

大群になりそれはまさに波が覆いかぶさるようなモンスターの数が空に襲いかかるそれに空はただ拳をそのモンスターの波に向けた

「空虚刀流・姫檜扇水仙」

拳から波動が放たれるそれは波のよう襲いかかるモンスターを一瞬にして吹き飛ばし体制を崩したところで空は動く一番近くにいたモンスターの顔面に蹴りを叩き込み吹き飛ばすそのモンスターの足を掴み地面に陥没させる。

背後から迫るモンスターを気配で感じその場をしゃがみ自分の真上ギリギリに鋭い爪が通過し空はそのモンスターの顎を掴み地面にそのまま叩き込み頭を潰した。そして自らを刀と連想させる構えを取り振りながら一歩前へ進む！

「花震月夕！！！」

それはまさに発射された螺旋<sup>トルネード</sup>あたりを巻き込みながら貫き切り裂き引き裂く暴走者

「もう、いつちょ・・・！」

花震月夕を中断させ新たに空は自らの爪を立て腕を交差させ力を込め更になる奥義を繰り出す

「羞月閉花！！！」

辺り一面を覆う鎌鼬の嵐、塵も許さないその千刃はモンスター一瞬にして斬り消し鮮血しか残さず空の周囲はまるで花が閉じたような痕が残った

「」

「！！！」

モンスターは狂乱するように空に襲いかかる彼らには負に支配され理性はないあるのはただの野獣のような生存本能、自分に害があるならただ殺す。たとえその相手が自分より圧倒的に強くても・・・

「死して希望を望み」

まるで歌うように迫り来るモンスター反撃していく

「生きて絶望に折れ」

前から来れば拳を

「連鎖しそして立ちあがる光」

左右から来れば回し蹴りを

「影から闇は生まれ光を飲み込み」

背後から来れば肘の打撃を

「……そして誰もいなくなった」

ぴたっ、と演劇は終末した。対光闇完全死滅魔法『グラウンド・ゼロ』それは孤独の魔法、それを使えばただ辺りは鎮まるだけ誰かの鼓動も呼吸も声も全てを死なす究極にして最悪の魔法

「まっ、こいうことしか使わないけどね」

空の眩きは沈黙を守る屍で作られた山の頂上で静かに冥獄界に響いた







「ぶはあああ・・・くう・・・」

一仕事終え空はリンボックスに戻っていた一度紅夜の家に戻った  
が帰ってきていないということはチカと晩飯を一緒に可能性が高く  
「僕の飯は無し

「うううううう」

唸るような声を出しながら空は街を一面できる有名な公園で一人ビールを飲みまくっている・・・やけ酒である。

「はぁ・・・」

今思うと悲しいものだ昔の紅夜ならまっすぐに自分の傍にいてくれたにもう自分の知っている紅夜はいなくなり他の人と親密な関係を持つようになった一番の相棒でも親友でもある自分は一人ぼっち

「・・・」

自分の中で黒いドロドロした想いが溢れ出すが自分に黙れと言いつける・・・紅夜が自分の手の中から逃げたのは自分のある行動の性である。分かっている分かっているけど夜天 空として破壊神として初めての友達が遠い場所に行ってしまったようにそれが空の心を刺す

「しかたがないよね。紅夜が決めた道だもん・・・僕に出来るのは紅夜は冥獄神として完成させること  
それさえ成し遂げれば・・・」

落ちていく夕焼けの空を見ながらただ黄昏れる少なくとも今の紅夜は自分を必要としてくれていたから自分はまだゲームギョウ界にいていいかもしれない

「I wish 出逢ったこの場所で

Go fight 命が萌えるまで

I don't forget 果てしない旅へ

Promise to you 誓いは一つに」

思わず口が動き歌う。ただ自然に元からその風景に合ったようにその歌を

「『悲しみの数だけ 絆が結ばれる』  
女神さまが教えてくれた」

漆黒が空を飲み込もうとする光景を見ながら昔と今を思いながら

「Everybody now 記憶の空

Happiness? Lucky? Your smile?

誰にも負けない 笑顔に逢いたい

Everybody Know 諦めない」

彼女が守りその意思是現代の女神たちが受け継いでくれたこの先の未来はだれにも分からない神であっても

「Happiness? Lucky? Your smile?

未来を?もう...Love&amp;peace」

だけど紅夜も含めてみんなならやってくれるみんながそれを夢と掲げている限りはだれかとする夢は現実する力があるから結果だけに理屈に捕らわれなにも見ようとしなかった自分の愚かな行為が今も胸に締め付けるけど・・・

「――信じよう彼らを」

それが僕の破壊神として彼らにできることでありそれが夜天 空としてゲームギョウ界にできる最後の行い

「……あっ」

さて、帰ろう立ち上がったとき草むらに顔出している誰かを目があつた。整った顔つきに濃い桃色の瞳、恐らくストレートに伸ばした蒼い髪、特徴的なヘッドホンが見えた彼女の名前は………

## とある破壊神の一日前篇（後書き）

スーパー空タイム！強い！！チート！色々滅茶苦茶！それが夜天空！

・・・と言いますか。・・・書くことがない最後ちょっと出たけどあのキャラ登場！・・・ファルコムどうしよう・・・

爪紅：引っ掻きけど魔力で強化した爪は鉄すら容易に切り裂く

姫檜扇水仙：拳を突きだし波動を撃つ技

羞月閉花：奥義の一つ爪紅の強化版で周囲に鎌鼬を発生させ辺りの敵を原子レベルまで切り刻む技

グラウンド・ゼロ：闇属性または光属性のモンスターなら問答無用で死の概念を与える最悪魔法だがある程度の実力者（下っ端レベル）なら無効化可能でしかしこれ無の可能性である人間は無害でそれに準ずる生き物も無害そもそもゲームギョウ界に光闇属性のモンスターがないのでいまのところ他世界ぐらいでしか意味をなさない。あるいみ雑魚のみにしか効かない使いどころが難しい魔法

とある破壊神の一日後篇(前書き)

ゲームやりながら書いていたらこんなに遅くなってしまった・・・  
すません

## とある破壊神の一日後篇

「はぁ・・・」

太陽が沈みかけた夕闇に染まった道を歩く一人の少女。

彼女の名前は5pb. と言いリーンボックスに済む至って普通の少女だが彼女には一つの夢があったそれは『プロの歌手』になることだが自分の性格はとてヒドい人見知りそんな自分がまず大勢の前で歌うなんて考えただけで身体が震える。数少ない友達はその歌を褒めてくれるがそれじゃダメだと思う

「・・・」

「・・・うた？」

耳に入ってくる人の声、自分も歌手を目指している人でそれなりに知識はあるがその歌はその声はとて綺麗だった。誰が歌っているのか気になってしまい彼女5pb. は足を進めた

「うわぁ・・・」

街が一面できる公園に音源者はいた手すりに座り沈んでいく太陽の方を見ながら唄う誰かが居た。

夕焼けの光より輝く黄金の髪とコートの上からでも分かる華奢な身体、近くに空のお酒があるのが気になるが完成したパズルのように隙間のない整った顔つきは晏然とした表情で唄っている。その曲は音符はまるで耳に入ってこないまるでそれが一種の風景を見ている

かのように目にそして心に溶けていく

「（一体誰だろう？）」

いままで色々な人の曲を聴いてこともあるがこんなに心に染みる歌手は聞いてことがない。無名という可能性もあったがそこの歌手より圧倒的に上手い彼女が無名である方がおかしく思うほど彼女の声は透き通っていた

草むらからひっこり顔出し彼女の唄を見ていたが終わり上がった時にこちらに向き視線が交差した

「（はっ、どっ……どうしよう!!）」

すぐに正気に戻るもしかして練習中で邪魔をしてしまったかもしれないそうなる自分は大変なことをしてしまったかもしれない

「つかまえた」

「えっ？」

この場から立ち去ろうと思ったとき後ろから甘い香りが鼻を刺激し腹部に何かが巻きつかれる

「……………!!……!!」

見ず知らずの人にいきなり抱きつかれ全身の血液が大暴走し目が回り意識が遠くなっていく

「あれ？ちよ、えっ、なんで？」



混乱したように彼女は声を上げるがそれは5pbの耳にはいることとはなく熱暴走した身体はゆっくりと力を無くした

・・・遊ぶ半分で抱きついたら気絶した。一応、彼女が極度の人見知りであることは知っていたがまさかこれほどとは

「どっ、どっど、どっしよう・・・」

全くの予想外の展開に彼にしては珍しく慌てる空、過去のゲームギョウ界を知っているとはいえさすがに彼女がどこに住んでいるなんてそんなことは分からない。いつそのこと紅夜の家を持っていくかと思っただがそれだと誘拐だと思わる可能性有り

「そっ、そっだ！自前に連絡しておけばいいんだ！」

そんな当たり前のことを要約思いつき空はコートの中から携帯電話を取り出すメール着信が100件くらいあったが無視、力行から一気にコまで下ろし登録している紅夜の電話番号を鳴らし空中にディスプレイが投影される・・・これは世界を挟もうと次元が違って通じる無駄にハイスペックな携帯だ。ちなみにこれは空とクロウの協力により出来たモノである

『あーもしもして空か』

少しの沈黙のあと空中に投影されたディスプレイから表示される紅夜の顔、移動中だったのか隣にはチカの姿もある

「今日紅夜の家ひとりお客さん入るけどいい？」

『客？お前の知り合いかなにかか？』

うっとうと空は声を零した。まさか遊び半分で抱きついたら気絶した人をなんて口が裂けても言えるわけがない

「えっと、そっだよ！偶然会ったら気があってね・・・あはははは」

嘘と真実を交せてごまかす画面の向こう側では急かすチカの姿が見えた

『まあ・・・いつか。すまん食事とかそつちですませてくれ』

その言葉を最後にプツンと切れる安心したようにため息をつく空、隣には眠ったような呼吸音が続ける5pb .

「・・・・・・・・」

これから少しは自分の行いに自重しようと思いつつながら空は5pb .  
を背負い紅夜の家へと帰宅した



「あ、れ？ここは・・・」

目を開けると見覚えのない天井起き上がりあたりを見回すと知らない部屋

「えつと・・・」

霧の掛かった記憶を探りさきほど何が自分の身に起きたのかを思い出し顔を紅潮させる

「起きた？」

「ひやあああ！！！！」

突如目の前に抱きついてきた彼女の姿が現れるその手には湯気が立つティーカップが握られていた

「オーバーリアクションだね」

ははと口と尖らし自分が寝かされていたベットに腰を下ろし紅茶の入っていたティーカップを渡される

「温まるよ」

「あ、ありがとうございます」

まだ頭の中が混乱しているが譲られた紅茶を一口、甘さ控えめの味が身体を染みる

「僕の名前は夜天 空みんなからは空って呼ばれているよ」

友好的に差し出された手、しばらくして自分もその手を握り返した

「ボクは5pb・・・です」

「カチカチだねそんな取って食おうなんて思ってないのに」

苦笑いをする空と言う人は上品に紅茶を飲んで時間を置きこちらを真っすぐ見た

「僕の唄はどうだった？」

落ち付かせるように声を掛けるほんと彼女と仲が良かったえつと・  
・ケイブだっけどう仲良くなったが経緯が知りたいよ世話話から入  
ろうと僕は声を掛ける

「えつと、凄く・・・上手でした」

「そっか」

・・・やばい、次に通じる話が思いつかない。早くも詰んだ

「ボク歌手を目指しているんです」

5pb から話題が来た彼女の悩みを聞いた極度の人見知りにより  
自分の夢であるプロの歌手になれるだろうかとまた僕のような唄を  
どうすれば歌えるだろうと等々

「ーねえ」

聞かれたら答えあげようホトトギス？だっけまこれでも長生きし  
てきたから人の生きざまとか色々見てきたら相談には乗ってあげよ  
うじゃないか

「君はなんのためにプロの歌手になりたいの？」

「えっ？」

根本的な問いなのに声を零す5pb .

「名誉のため？お金の為？そんなもんじゃないでしょ？」



「……うん」

「仮に君の夢が叶ったとしようプロになりました……後は？」

「……」

ちよつと意地悪な言い方が知れないけどそれが僕流なんだな

「プロになることじゃなくて別にあるんじゃないの？」

「……ボクの、ボクの歌でみんなを幸せにしたい！」

それでいいんだよプロになったって思いがなければただの名義、どんなことをやるにしても大切な思いがないと後で折れてしまつかもしれない

「僕の親友が言っていたよ

後悔しても

苦悩しても

過去を悔やんでも

なにもしないことは愚かなこと……ってね」

一歩前に踏み出してそれが成功だったり失敗だったりしてもそれは  
全て自分の糧になる

「……そうだよねなにもしないこと事態が一番いけないことなんだね」

「そうそう、別に君のその人見知りはどうとかそんなこと二の次なんだよ……誰かに幸せしたいんでしょ？」

「うん・・・うん！」

いい顔になったこれで大丈夫あとは努力だね想いの大切だけどそれも大事なことからね

「最後に唄は聞くものじゃない。耳で聞いて脳で理解するのは会話だ、心で聞いて心で感じるそれが唄っとな僕は考えているんだからそんな唄を造れるように頑張っとな」

「ありがとうございます・・・ございます。空さんのおかげでボクできそうな気がします！」

「いえいえ、君がライブして輝く姿を楽しみにしているよ未来のアイドルさん」

悪いけど未来を知っている僕としては決められていることかもしれないけど少しの変化があるかもしれないその変化は大きくなりそしてみんなを巻き込んで新たな未来へ進むかもしれない。

紅夜が女神たちが定められた運命をぶち壊したという風に転んでもそれは望んだことだから信じる彼らの未来が明るいようにそしてそれを実現する力

――それは想い、未来を切り開き世界すら変えてしまう不思議な  
無限の可能性を秘めた力

とある破壊神の一日後篇(後書き)

ほのぼの系・・・にしたつもり、ふう・・・下手だな俺・・・誤字脱  
字あればよろしくお願いします

いざ！ラストেশョンへ！！（前書き）

今日から冬休み、スランプ気味で更新が遅くなるかも・・・すいません

いざ！ラストेशनへ！！

大地を埋め尽くす様に広がる巨大な工場の数々、黒煙が上がり空を浸食していき灰色になっていき川が流れるような人々の列が構成され絶対的に重厚を感じさせるここが黒の大地ラストेशनだ

「見ろ！人がゴミのよう

ガンツツツ！！！！（緋壊螺で空の頭を殴った音）

「いーたーいー！！！！」

横でいきなりネタに走ろうとする空に裁きを下し俺は歩き出す。今日は休日なので家族らしきグループが仲良く歩いてたり友達同士で買い物等をしている人たちも目に見えた

「くっ、ついにツツコミが口じゃなくて手になってきたか・・・！」

拳を握りしめ一体何を悔しがっているか意味不明な空は放置しておいて・・・

「待つてよー！無視しないでー！！！！」

辺りの視線が痛い見た目はかなりいい空が甘えるように抱きついてくるので男性からの視線がナイフのように尖っている

「・・・離れる、いや離れてください」

「いやだね」

お前は駄々っ子か！と喉まで来たが諦めの念が先に浮上してきてそのままにしておくことにした空もそのことを読んで腕に抱きついてくる・・・正直暑い&鬱陶しい

「そういえばさあ」

思い出したように空が口を開いた

「紅夜の家・・・」

先ほどとは違い顔も声も真剣を感じ俺も思わず顔を引き締める

「えっちい本持っていなかったんだね！」

ガンツッ！！！（地面に頭を叩きついた音）

「いや〜紅夜も年頃（見た目）の男の子、一冊や二冊はあるかなと思って隅々まで探したんだけど見つからなかった・・・要求不満とかならないのかな？」

「いままでお前は一体俺をどう見ていたんだー！！！！」

超くだらないことだった空のあんな真剣な顔だったからゲームギョウ界の全てに関係することだと思っただわ！！！！





下手したら治安組織でも呼ばれる可能性だったのでこう言って誤魔化すことしか思いつかなかった・・・民衆の人たちもああなるほどとしたリアクションで頷いてくれた・・・助かったけど罪悪感もおまけに感じた

そんなこともあったがとりあえずラステーションの協会に到着！・・・空？知らない。

さっそくノワールに会いに行こうとするが協会関係者曰く「ブラックハート様は先ほどお出かけになりました」とのことさすがに場所については自分達も知らないということなので急ぎの用事ではないけど暇なので探すことにしたが・・・

「久しぶりねコウヤ！」

目の前には強気な瞳を輝かせ鍛錬でもしていたのだろうか額に汗を浮かばせたユニがやってきた

「ユニ・・・久しぶり元気になっていたか？」

「もちろんよ！・・・あの神出鬼没は？」

神出鬼没？・・・ああ空かそういえばあいつユニとまともに会話もしてないからこっちは名前知らないんだあっちは知っているみたいだが・・・

「星になった」

「え・・・そっ、そうごめん」

・・・空よお前死んだことになっているぞ

「ユニ、ノワールを知らないか？」

「お姉ちゃん？知らないわよ。用事なら帰って来た時私が伝えておくけど？」

空を遙か彼方へ殴り飛ばしてしまったから帰ってくるまで待つしかないだとすると当分暇になる

「いや、そこらへんぶらぶらして帰ってくるのを待つよありがとユニ」

ちようどの高さにあったユニの頭を撫でるさらさらとした繊細な感触が手から伝わってくる

「う、子供扱いしないでよ！」

顔面真っ赤にしてうがーと吼えるユニだったがそれに愛くるしさを感じユニも俺の手を弾かないのでしばらくこの状態が続いた

「可愛いなユニ」

「なっ、なっ・・・！」

ネプギアも可愛いがユニも可愛いこっちは愛くるしさを感じる空のよゆうな滅茶苦茶な奴と付き合っていたらメンタル面で疲れるし更にこの前はそれ+ベールとチ力の無言火花散らしの戦闘で疲れ果てるなので俺には癒しが足りない！・・・あつもちろんロムとラムも可愛

いよあつちもいいよね抱きついてきた時とかこっちも抱きしめ返してしまっ

「あ、あんなんかに褒めてもらっても嬉しくないんだからね！」

ツンデレ発言乙そう頭に電波が届いたが左から右いまは癒しを満喫しよう

まっ、最終的にはユニがタコのように顔真っ赤にして去って行った。ふむ、もう少し癒して欲しかったがやりすぎるとセクハラで訴えられ可能性はあるので我慢しよう

「俺も素振りしようかな」

モンスター討伐も考えたが最近緋壊螺ばかり使っている気がして紅曜日使いが鈍っているかもしれないからく拓けた場所でしょうと俺は考え協会から出て人気の少ない森の中へ入って行った。

森の中はとても静かでモンスターもいなそうだ素振りに使えそうな場所を探していると木の奥からブラックハートらしき影が見えた

「（女神化している・・・とうことは敵!?!）」

そう考えすぐさま動く森林をかき分けすぐ近くまでいくが戦闘しているような音はしないむしろノワールの声しか聞こえない一応警戒しつつ緋壊螺と紅曜日を持ち木の陰からそっと顔を覗かせると・・・

「協会に変わってお仕置きよ！」

・・・はあ？

「冥界の王のしもべ達よ！とつととお家に帰りなさい！」

・・・ええ？

「この世の悪のある限り、正義の怒りが私を呼ぶ！」

・・・俺は夢でも見ているだろうかあの凜として真面目なノワールが一人立って痛いセリフを連発している頬を主一気に抓って見るが・・・痛い

「世のため人のため！」

悪の女神の野望を打ち砕くブラックハート・・・この漆黒の輝きを恐れぬのなら、かかってきなさい！！！」

彼女の獲物である巨大なシュートソードを召喚し垂直に剣先を向ける彼女の姿はかっこよくもあり・・・とても寂しいものだった

「（これは・・・帰ろう）」

まさかノワールにそんな趣味があったなんて世の中は何があるか予

想なんて立てられないな

バキッ

「だれ!？」

緋壊螺と紅曜日を収めこの場を立ち去ろうとしたとき完全に気が抜けてしまい近くの木の枝を踏んでしまった!

「……コウ……ヤ？」

「よっ、よっ……」

とりあえず手を上げ挨拶ばっちり目があったてしまいさあこれからどうしよう頭を必死で動かす

「……見た？」

「い、いや!見てないぞ!超痛いセリフで決めているノワールなんて見てないぞ!……!」

……

……

……



「これを止める為にはDメールでも送ってもらわないと無理だああ  
あ！……！」

あたりの木をなぎ倒し迫ってくるノワールは本当に怖いものだって  
いうかおれ不生死だから死なない〓なんども殺される〓メンタル  
面で死？

「ぐっ！」

背中にぶつかる斬撃を背負っている紅曜日で逸らすがそのまま突進  
してくるノワールに押し倒され腰の緋壊螺を抜き恐らく来るであろ  
う銃撃に備えるが

――紅夜の唇に温かく潤ったものが触れた





いざ！ラストেশヨンへ！！（後書き）

ノワール暴走ww

想い人に見られたらああなるかなと思いつながら書いてしまった  
後悔しても反省はしてない！次回をお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5208y/>

---

超次元ゲームネプテューヌ～黒閃の騎士～『外伝』

2011年12月23日00時52分発行